

京都府峰山町文化財調査報告第21集
京都府遺跡調査概報第100冊

京都府中郡峰山町

赤坂今井墳丘墓

第3次発掘調査概要報告

2001

峰山町教育委員会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府中郡峰山町

赤坂今井墳丘墓

第3次発掘調査概要報告

2001

峰山町教育委員会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1



(1)赤坂今井墳丘墓全景(東から)

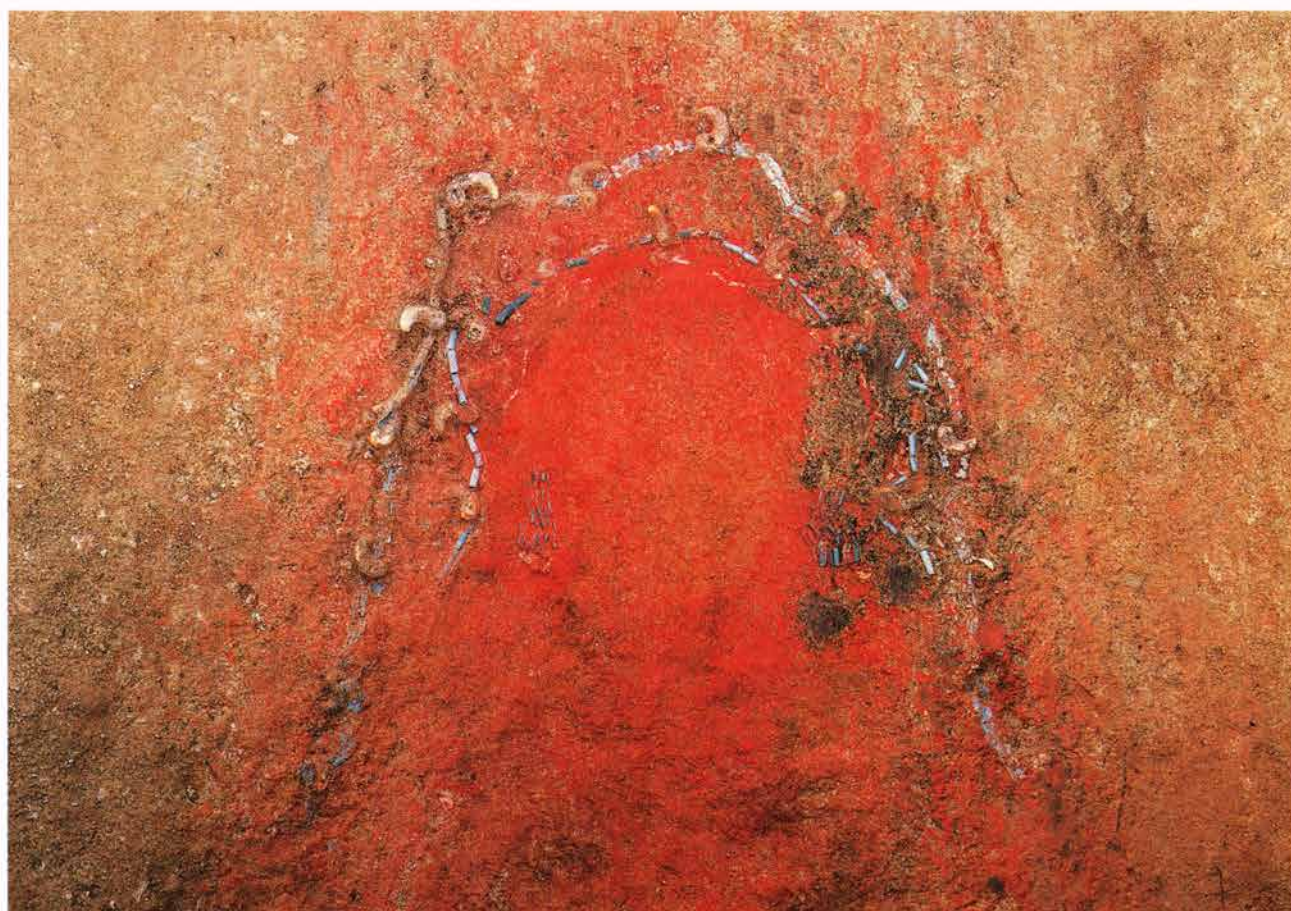


(2)第1主体部全景(北から)

巻頭図版 2



(1)第4主体部全景(西から)



(2)第4主体部玉類検出状況(西から)

序

峰山町が位置する丹後地域は、国営農地開発事業をはじめとする国や府が推進する各種事業、それぞれの地域の特性に応じた施設建設や交通網の整備等により、近年その姿を大きく変えようとしています。

今回の発掘調査もまさに、丘陵裾部を走る府道網野峰山線交通安全施設の設置を目的とした道路整備から始まったものでした。調査が進むにつれ、この遺跡が全国的にも例のない規模でありかつ遺存状態の良い装飾品の出土により、その重要性が明らかになってきました。このことから、直ちに遺跡保存のための協議が関係機関の中で始められその結果、遺跡を全面保存することが決定し、遺跡が立地する土地については峰山町で買い上げることとなりました。

近年、発掘調査のニュースが多く取り上げられますが、それはそのまま開発事業の多さを物語るものです。その中で遺跡を保存するには多くの課題の解決が必要となります。今回の例は関係者の協議が実を結び、早い段階で全面保存が決まった好例といえるものです。

今回の発掘調査においても、当時の丹後を理解する上で欠かすことのできない貴重な成果を得ることができました。全面保存が決まったこの遺跡を、地域の中で活用してゆくことこそ今後の課題であり、未来に伝えてゆく文化財として保護していきたいと考えているところであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、調査委員として調査の方針について御指導いただきました京都大学名誉教授小野山 節先生、大阪大学助教授福永伸哉先生をはじめ関係機関の方々、酷暑の中で発掘調査に従事していただいた学生諸氏、作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月吉日

峰 山 町 教 育 委 員 会

教 育 長 引 野 恒 司

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書は赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査に関する概要報告書である。
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
赤坂今井墳丘墓第3次	中郡峰山町字赤坂 小字今井・ケビ	平12. 7. 6 ~ 10. 18	峰山町	岡林峰夫・ 石崎善久

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が担当した。

本文目次

赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 調査体制	2
3. 調査委員会の経過	3
4. 位置と環境	3
5. 調査の概要	5
(1) 墳丘の調査	5
(2) 第4主体部の調査	11
(3) 第1主体部の調査	20
(4) 第19周辺主体部の調査	27
6. まとめ	31
7. おわりに—今後の展望—	38

挿図目次

第1図 峰山町の位置	4
第2図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図	6
第3図 赤坂今井墳丘墓地形測量図	8
第4図 赤坂今井墳丘墓地形測量図(調査後)および検出遺構配置図・断面図	9
第5図 Wトレンチ南壁断面図	10
第6図 Wトレンチ出土土器実測図	11
第7図 赤坂今井墳丘墓第4主体部円礫出土状況平面図	12
第8図 第4主体部出土円礫法量グラフ	13
第9図 赤坂今井墳丘墓第4主体部木棺検出状況実測図	15
第10図 第4主体部棺内玉類実測図	16
第11図 第4主体部鉾・鉄剣出土状況図	17
第12図 第4主体部出土遺物実測図(1)	18
第13図 第4主体部出土遺物実測図(2)	19

第14図	第1主体部墓壙上陥没痕実測図-----	20
第15図	第1主体部墓壙上陥没痕および円礫・土器検出状況実測図-----	21
第16図	第1主体部および柱穴列実測図-----	23
第17図	第1主体部コンタ図および土層断面図-----	24
第18図	第1主体部陥没痕内出土遺物実測図-----	26
第19図	第1主体部ピット3埋土出土遺物実測図-----	27
第20図	第19周辺主体部実測図(1)-----	28
第21図	第19周辺主体部実測図(2)-----	29
第22図	第19周辺主体部出土遺物実測図(1)-----	30
第23図	第19周辺主体部出土遺物実測図(2)-----	31
第24図	赤坂今井墳丘墓墳丘復元図-----	34
第25図	弥生後期から庄内併行期墳墓出土土器-----	36
第26図	頭飾り・耳飾り復元図-----	39

付 表 目 次

第1表	赤坂今井墳丘墓検出主体部・周辺主体部一覧表-----	32
-----	----------------------------	----

図 版 目 次

図版第1	(1)調査前近景(南西から)	(2)調査前遠景(南から)
図版第2	(1)調査前遠景(北から)	(2)調査後全景(上空から、上が西)
図版第3	(1)調査後遠景(上空から、東から)	(2)調査後全景(上空から、東から)
図版第4	(1)調査後全景(上空から、北から)	(2)調査後全景(上空から、南から)
図版第5	(1)Wトレンチ近景(北東から)	(2)S-2トレンチ全景(北東から)
図版第6	(1)南側墳丘縦断トレンチ全景(北から)	(2)N-1~N-3トレンチ全景(西から)
図版第7	第4主体部全景(西から)	
図版第8	第4主体部玉類検出状況(西から)	

- 図版第9 (1)第4主体部全景(上空から、上が南)
(2)第4主体部陥没痕内円礫検出状況(東から)
- 図版第10 (1)第4主体部陥没痕内円礫検出状況細部(東半部分、東から)
(2)第4主体部陥没痕内円礫検出状況細部(西半部分、北から)
- 図版第11 (1)第4主体部陥没痕内土器(第12図2)検出状況(東から)
(2)第4主体部陥没痕内土器(第12図1)検出状況(北から)
- 図版第12 (1)第4主体部墓壙内埋土横断面(西から)
(2)第4主体部木棺痕跡検出状況(東から)
- 図版第13 (1)第4主体部木棺内調査状況(東から)
(2)第4主体部木棺内埋土横断面(西から)
- 図版第14 (1)第4主体部棺内遺物検出状況(西から)
(2)第4主体部玉類検出状況(北から)
- 図版第15 (1)第4主体部耳飾り(北側)検出状況(西から)
(2)第4主体部耳飾り(南側)検出状況(西から)
- 図版第16 (1)第4主体部棺内鉄製品検出状況(北から)
(2)第4主体部墓壙内土器(第12図12)検出状況(東から)
- 図版第17 (1)第1主体部陥没痕検出状況(北から)
(2)第1主体部調査状況(北から)
- 図版第18 (1)第1主体部陥没痕・柱穴列検出状況(南から)
(2)第1主体部柱穴列全景(北から)
- 図版第19 (1)第1主体部陥没痕埋土内遺物検出状況(北から)
(2)第1主体部陥没痕底面円礫・土器検出状況(北から)
- 図版第20 (1)第1主体部陥没痕内円礫検出状況細部(南半部分、東から)
(2)第1主体部陥没痕内円礫検出状況細部(北半部分、東から)
- 図版第21 (1)第1主体部陥没痕内円礫・土器検出状況(北側、南東から)
(2)第1主体部陥没痕北端部円礫検出状況および埋土横断面(南から)
- 図版第22 (1)第1主体部陥没痕内辰砂検出状況(東から)
(2)第1主体部陥没痕上土坑(東から)
- 図版第23 (1)第19周辺主体部検出状況(西から)
(2)第19周辺主体部土器棺検出状況(北から)
- 図版第24 (1)第19周辺主体部棺蓋除去状況(北から)
(2)第19周辺主体部棺身頸部閉塞状況(東から)
- 図版第25 (1)第19周辺主体部棺内流入土除去状況(西から)
(2)第19周辺主体部完掘状況および周辺主体部検出状況(南から)
- 図版第26 出土遺物(1)

図版第27 出土遺物(2)

図版第28 出土遺物(3)

赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要

1. はじめに

赤坂今井墳丘墓は、平成10年度に府道峰山・網野線の拡幅工事に伴う事前調査として京都府峰山土木事務所の依頼を受け、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが試掘調査を実施した(第1次調査)。その結果、当初、山城の帯曲輪と考えられた平坦面より複数の主体部と思われる土色変化を確認し、また、同時に弥生後期末と考えられる土器・石製品を検出した。この段階で、大形弥生墳丘墓である可能性が考えられたが、調査面積が少なく確証を得るに至らなかった。

翌、平成11年度は第1次調査の成果を受け、墳頂部を含めて面的に拡張を行い、この遺跡の性格を明確にするために、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を実施した(第2次調査)。その結果、墳頂部からは6基の主体部^(注1)が確認され、中心には長軸14mを測る巨大な墓壙が存在すること、周辺テラスをもつ大形方形墳丘墓であることが明らかになり、周辺からは7基の周辺主体部^(注2)を検出した。この墳丘や中心主体部の規模は、弥生時代後期末の国内でも最大級のものであることが明らかとなったため、関係諸機関と協議の上、現状で保存がなされることが決定した。同年、峰山町教育委員会は遺跡の重要性から、町有地として墳丘墓周辺3,557㎡を用地買収し、立木伐採も整備事業の一環として実施した。

平成12年度には、峰山町がこの遺跡の活用を図るための調査を計画し、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが峰山町から依頼を受け、峰山町教育委員会と(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが共同で調査を実施した(第3次調査)。調査は峰山町が赤坂今井墳丘墓調査委員会を組織し、第1回委員会を6月27日に開催した。ここで調査の方針を決定したのち7月6日から現地作業に着手した。調査は主体部の規模・構造を明らかにすること、墳丘の規模・構造を明らかにすることに主眼を置くこととした。したがって、墳丘四周を確定するためのトレンチを設定し、墳頂部は面的に調査を行うこととした。その結果、墳頂部においては2基の主体部を調査し、そのうちの第4主体部については棺内を完掘する段階まで調査を行った。中心的主体部である第1主体部は、木棺の痕跡を確認し、木棺直葬であることを確定した段階で調査を終えた。10月12・13日には記者発表、10月15日に現地説明会を実施し、約1,000名の参加者を得ることができた。

調査の途中、峰山町と京都府教育委員会により複数回の協議が行われ、また、3回におよぶ調査委員会が開催された。現地作業はその方針に従っている。調査は10月18日まで行い、それ以降11月28日までは埋め戻し作業を実施した。

なお、遺物の整理については、十分な整理期間、また理化学的分析を行うための期間が確保できなかったため、将来的に本報告を行うこととし、現状で作成することのできた遺構・遺物実測図を中心に公表することを目的とした。なお、本書では標高はTP、方位は磁北を用いた。また、遺物の実測図は土器を原則として1/3、鉄製品は1/2で掲載している。遺物実測は土器を同志社大

学学生三好 玄が、鉄製品を同志社大学大学院生壺岐一哉が中心となって行った。遺構図のトレースは、石崎・壺岐・三好・京都教育大学学生村上圭太がそれぞれ分担して実施した。また、本報告における執筆は石崎・岡林・壺岐・三好・愛媛大学学生中川 和が分担して執筆し、石崎が編集した。なお、文責は各項末に記載した。その他、円礫は京都大学大学院生土屋みづほが主となって観察を行い、村上が補助を行った。赤色顔料の肉眼観察は大阪大学大学院生石井智大が現地で実施した。遺構写真は原則として石崎が撮影し、第4主体部の一部については(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第1課資料係主任調査員田中 彰が行った。遺物写真は全て(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにて田中が撮影した。なお、現地調査・整理報告作業の過程で多くの方々からご協力・ご指導^(注3)を賜った。記して謝意を表したい。

(石崎善久)

2. 調査体制

今回の発掘調査は峰山町教育委員会と(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが合同で実施した。発掘調査における調査体制は以下のとおりである。

赤坂今井墳丘墓発掘調査委員会

- 委員長 引野恒司(峰山町教育委員会教育長)
- 委員 小野山節(京都大学名誉教授・京都府文化財保護審議会委員)
- 福永伸哉(大阪大学助教授)
- 上田博之(峰山町助役)
- 中村基彦(峰山町企画商工課長)
- 谷口正春(峰山町建設課長)
- 芳賀俊彦(峰山町文化財保護審議会議長)
- 田中光浩(峰山町文化財保護審議会委員)
- 小北邦雄(赤坂区長)
- 事務局 山本邦昭(峰山町教育委員会次長)
- 中村悦雄(峰山町教育委員会次長補佐)
- 岡林峰夫(峰山町教育委員会主事・現地調査担当)
- 調査機関 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 関係機関 京都府教育庁指導部文化財保護課
- 京都府立丹後郷土資料館

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査体制

- 調査責任者 木村英男(常務理事・事務局長)
- 調査担当責任者 平良泰久(調査第2課長)
- 事務局 福嶋利範(次長兼総務課長)
- 安田正人(総務課主幹総務係長事務取扱)

杉江昌乃(総務課主任)

今村正寿(総務課主事)

鍋田幸世(総務課主事)

西林紀子(総務課主事)

岡田正記(総務課主事)

現地調査担当者 水谷壽克(調査第2課課長補佐兼調査第1係長)

石崎善久(調査第2課調査第1係調査員・現地担当)

発掘調査参加者(順不同・敬称略)

調査補助員：壺岐一哉・石井智大・福辻 淳・土屋みづほ・古川 匠・中川 和・三好 玄・
村上計太・小笠原順子・山口奈美

整理 員：藤村文美・谷口勝江

作業 員：植田美奈子・芳賀 理・岸田 進・藤村雅則・石田孝之・藤原恵子・藤原正枝・
重藤義子・引野一雄・福本さくら・安達鈴子・今田照子・砂原準治・田中達男・
伊勢戸鐵也・松本俊和・荻野浩美・井上和江・山本美也子・宮本 清・徳田 茂

3. 調査委員会の経過

発掘調査委員会は有識者、地元関係者および町関係者で構成、計3回開催した。また、この他にも、小野山節委員および福永伸哉委員にはそれぞれ一度現地指導を賜った。

第1回調査委員会(平成12年6月27日) 委員の紹介の後、委員長、委員長職務代理人を選任、規約の制定を行う。さらに、調査までの経過を説明、現地視察の上で、調査方法・トレンチ配置等について検討した。

第2回調査委員会(平成12年8月10日) 現地視察の上、今後の調査の進め方について意見交換を行う。第1主体部の規模が明らかになってきた中で、第4主体部の完掘を優先させること、第1主体部についても、一部、内部構造の把握を行うことを確認。

第3回調査委員会(平成12年10月6日) 第4主体部を中心とした調査成果について現地視察の後、今後の方針について検討。追加調査の必要性および活用に向けての意見をうかがった上で今後のスケジュールを確認した。

(岡林峰夫)

4. 位置と環境

地理的環境 赤坂今井墳丘墓は京都府中郡峰山町字赤坂小字今井・ケビに所在する。峰山町は京都府の最北部、丹後半島のほぼ中央に位置する。丹後半島は若狭湾の西岸を画するように突出しており、冬には日本海を流れる対馬海流にのって朝鮮半島から漂着物が流れ着く地点としても有名である。

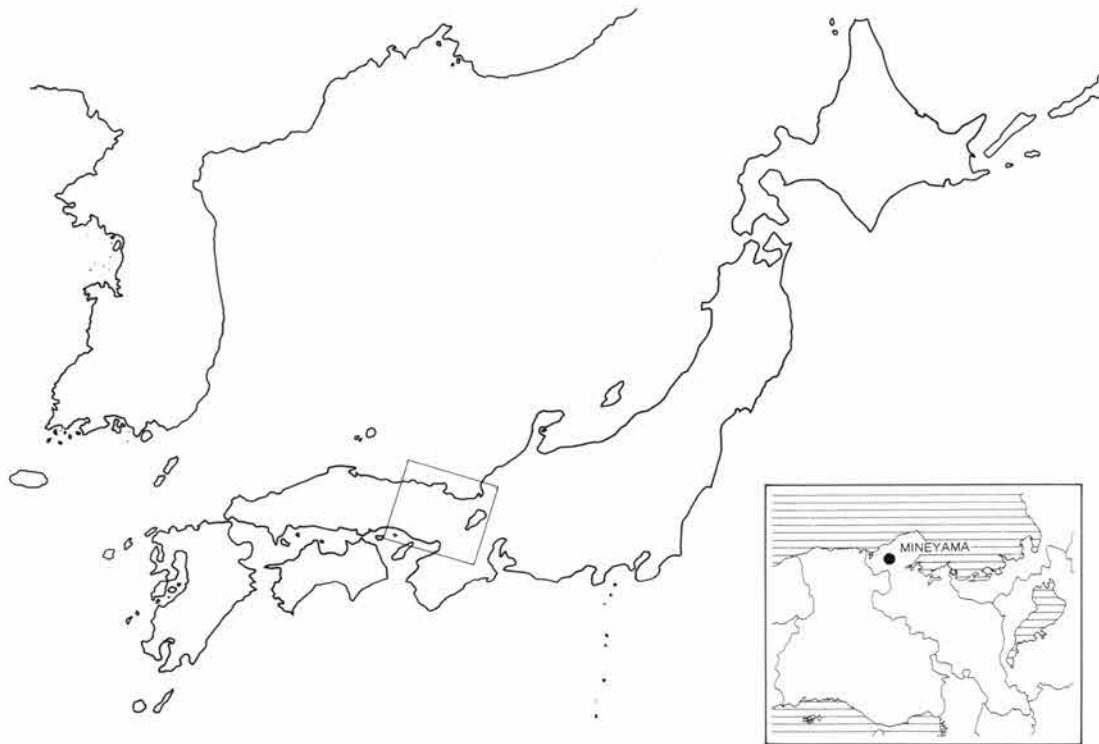
丹後半島の地勢は、標高683mを測る太鼓山を最高所に山岳・丘陵地帯から形成される。その山岳・丘陵地帯を縫うように、竹野川・野田川・福田川などの河川が流れ、沖積地を形成してい

る。なかでも、半島最大の河川は竹野川である。竹野川は高尾山と鼓ヶ岳に源を発し、丹後最大の平野部である中郡盆地を介して日本海に注ぐ。この流域には大宮町・峰山町・弥栄町・丹後町の各町が所在している。竹野川河口部は、現状でこそ沖積地となっているが、かつては潟湖が形成されていたことが明らかとなっている。

赤坂今井墳丘墓は、中郡盆地よりやや西北に位置する福田川と竹野川の分水嶺付近に立地する。福田川は久次岳に水源をもち、総延長5kmで日本海に注ぐ。福田川水系に分類される狭長な谷部分は現在の石丸付近を分水嶺とし、竹野川水系とは異なる谷地形・扇状地を形成している。福田川河口域は網野町に属し、現状では埋め立てが行われているが、これは昭和初期頃に行われた造成作業であり、かつては現北近畿タンゴ鉄道網野駅付近まで潟湖が形成されていたと伝えられる。赤坂今井墳丘墓は、竹野川の支流により形成された丘陵先端部に立地する。この立地のため、墳丘墓からの視界は限定され、可耕地・集落域を見渡すことはできない。この墳丘墓前面の谷部分は福田川河口域から、中郡盆地へと抜け、現在でも北近畿タンゴ鉄道や府道峰山・網野線が眼下に通る、この地域の主要交通路となっている。このように、赤坂今井墳丘墓の立地は、他の弥生墳墓が集落域・可耕地を望む丘陵を選地するのとは対照的なものといえる。

歴史的環境 ここでは丹後における弥生時代から古墳時代前半の遺跡の動向について概観する。なお、大きく竹野川水系・野田川水系・福田川水系・久美浜湾周辺地域に分類する。

代表的な大形集落として、野田川水系では蔵ヶ崎遺跡(前期)・日吉ヶ丘遺跡(中期)・須代遺跡(後期)・千原遺跡(中・後期)、竹野川水系では竹野遺跡(前期)・途中ヶ丘遺跡(前期)・扇谷遺跡(中期)・奈具岡遺跡(中期)・古殿遺跡(後期)・裏陰遺跡(後期)・新町遺跡(後期)、福田川水系で



第1図 峰山町の位置(1/15,000,000および1/4,800,000)

は松ヶ崎遺跡(前期)・浅後谷南遺跡(後期)。久美浜湾周辺では函石浜遺跡(前期)・浦明遺跡(中期)・橋爪遺跡(中・後期)を挙げることができる。このほかにも小規模な集落が多数確認されている。また、丹後では沖積地の調査が進展しておらず、今後、新たな大形集落の確認も十分予想される。

近年、丹後では弥生墳墓の調査事例が増加し、その成果が全国の注目を集めている。中期段階では大形貼石墓と方形台状墓が見られる。前者には寺岡遺跡・奈具岡遺跡・千原遺跡、後者には奈具墳墓群を代表的な事例として挙げることができる。後期段階になると、大形貼石墓は姿を消し、丘陵上に展開する方形台状墓群がその主流を占めることとなる。後期前半段階では三坂神社墳墓群・左坂墳墓群が代表的なものといえる。丘陵上に展開する木棺直葬形態の各主体部からは玉類・大形鉄製武器など豊富な副葬品が検出された。後期中葉の大風呂南1号墓では舟底状木棺を直葬する中心主体部から、ガラス釧・銅釧、11本にもおよぶ鉄剣が出土し、丹後に鉄製品が集積されている状況を示唆することとなった。後期後半から末葉にかけて、丘陵上に群集する台状墓群のほかに、独立して造墓される方形台状墓が確認されるようになる。この時期の墳墓の特徴として、舟底状木棺の採用、鉄剣の副葬の顕在化を挙げることができる。代表的な墳墓として、赤坂今井墳丘墓・金谷1号墓・浅後谷南墳墓・帯城墳墓群などがある。

大形前方後円墳出現までの集落の動態については不明な点が多い。代表的な事例として、古殿遺跡・浅後谷南遺跡・裏陰遺跡が当該期の集落として挙げられる。墳墓では大田南2・5号墳・内和田5号墳、白米山北古墳などを挙げることができるが、40m近くにまで巨大化した赤坂今井墳丘墓と100mを測る前方後円墳湧田山1号墳との間を埋める首長墓としては貧弱である。また、この時期から鏡の副葬が始まるようであり、大田南2号墳の龍鈕環状乳神獸鏡や、大田南5号墳の青龍三年銘方格規矩四神鏡などの後漢鏡はその入手経路も含めてさまざまな問題を提起することとなった。

古墳時代前期後半から末葉にかけて、丹後には200mクラスの前方向後円墳が相次いで造墓される。蛭子山1号墳・網野銚子山古墳・神明山古墳は丹後の三大古墳と称される。これら大形前方後円墳の出現背景についてもいまだ説明すべき問題点は多い。

(石崎善久)

5. 調査の概要

(1) 墳丘の調査

調査前の状況 調査地の伐採前における状況を概観しておきたい。墳頂部は植林によりスギ・ヒノキが植樹され、すでに10数mを計る巨木に成長していた。周辺部分は雑木林として放置されており、シイなどの巨木が生い茂っていた。墳丘の後背部西側の丘陵部分は竹林となっており、このタケが西側堀切部分から周辺テラス部分、墳頂部西側にかけて繁茂している状況であった。また墳頂部には近世瓦・花崗岩塊石などがわずかに散乱していた。墳頂部の一部および、西側堀切部分底面および周辺平坦面の一部には、耕作の痕跡を示す畝跡が観察された。墳丘西側斜面は崖面を呈しており、新しい段階に削平が行われたことをうかがわせている。



第2図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図(弥生・古墳時代)

(1/50,000 細かい網は集落遺跡・粗い網は古墳群もしくは墳墓群)

- | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-------------|
| 1：赤坂今井墳丘墓 | 2：浅後谷南墳墓 | 3：金谷1号墓 | 4：左坂古墳群・墳墓群 |
| 5：帯城古墳群・墳墓群 | 6：三坂神社墳墓群 | 7：大田古墳群 | 8：大田南古墳群 |
| 9：湧田山1号墳 | 10：カジヤ古墳 | 11：浅後谷南遺跡 | 12：古殿遺跡 |
| 13：扇谷遺跡 | 14：途中ヶ丘遺跡 | 15：中岡遺跡 | 16：大宮売神社遺跡 |
| 17：新町遺跡 | | | |

また、地元の方からうかがった近年のこの地の土地利用であるが、戦前には「若宮さん」と呼ばれる祠が奉ってあったそうである。「若宮さん」移築後(詳細な時期不詳)、戦中には開墾し、畑地として利用されていたそうである。戦後には、墳頂部を中心に植林が行われ現在に至る。これらの口伝は先述の現況に合致する。すなわち、墳頂部に散乱する塊石や近世瓦は「若宮さん」の祠に伴うものであり、畝痕跡は戦中の開墾に伴うものと考えられる。調査前に植林されていたスギ・ヒノキは戦後の植林に伴うものと判断される。

調査の方法 今回の調査の大きな目的が墳丘の規模・形態の確定であった。そのため墳丘南北を縦断するトレンチのほか、墳丘周辺部に6か所のトレンチを設定することにより規模・形態を明らかにすることとした。なお、今回の調査では墳丘やテラス部分の断ち割り作業を一切行っておらず、わずかに第4主体部墓壇北壁でのみ盛土の状況を確認したにすぎない。墳丘造成の方法についての詳細は今後の課題としたい。以下、各トレンチの概要について記す。

N1・N2・N3 トレンチ 推定墳丘北西隅部分に設定したトレンチである。この部分には畝痕跡が認められ、削平されている可能性が高かった。表土下約20cmのトレンチ南側で、地山面を検出した。また、トレンチ南壁断面で本来の墳丘基底部と考えられる部分を確認することができた(第4図▼印)。この点とWトレンチの延長線上を丹念に精査したが、墳丘隅部分についてはすでに削平されているものと判断された。このトレンチは、第2次調査時に北側テラスで確認されていた周辺主体部の広がりを確認するため、さらに東へと拡張することとなった(N2・3トレンチ)。また、平面的にはトレンチ中央で旧表土と見られる黒褐色土が带状に観察され、その北側部分は盛土により平坦面が形成されているものと判断された。またトレンチ東端では2か所の土色変化を確認した。1基(第20周辺主体部)はその形状から確実に周辺主体部と判断することができたが、もう1基(第23周辺主体部)については、大部分が調査範囲外であり、周辺主体部である確証を得ることができなかった。墳丘周辺テラス北東部分では第2次調査時のものを含め、総数9基の周辺主体部を確認した。なお、このほか、巨木の株により全体を確認することはできなかったものの、墓壇埋土の可能性のある土色変化を確認した(第24周辺主体部)。

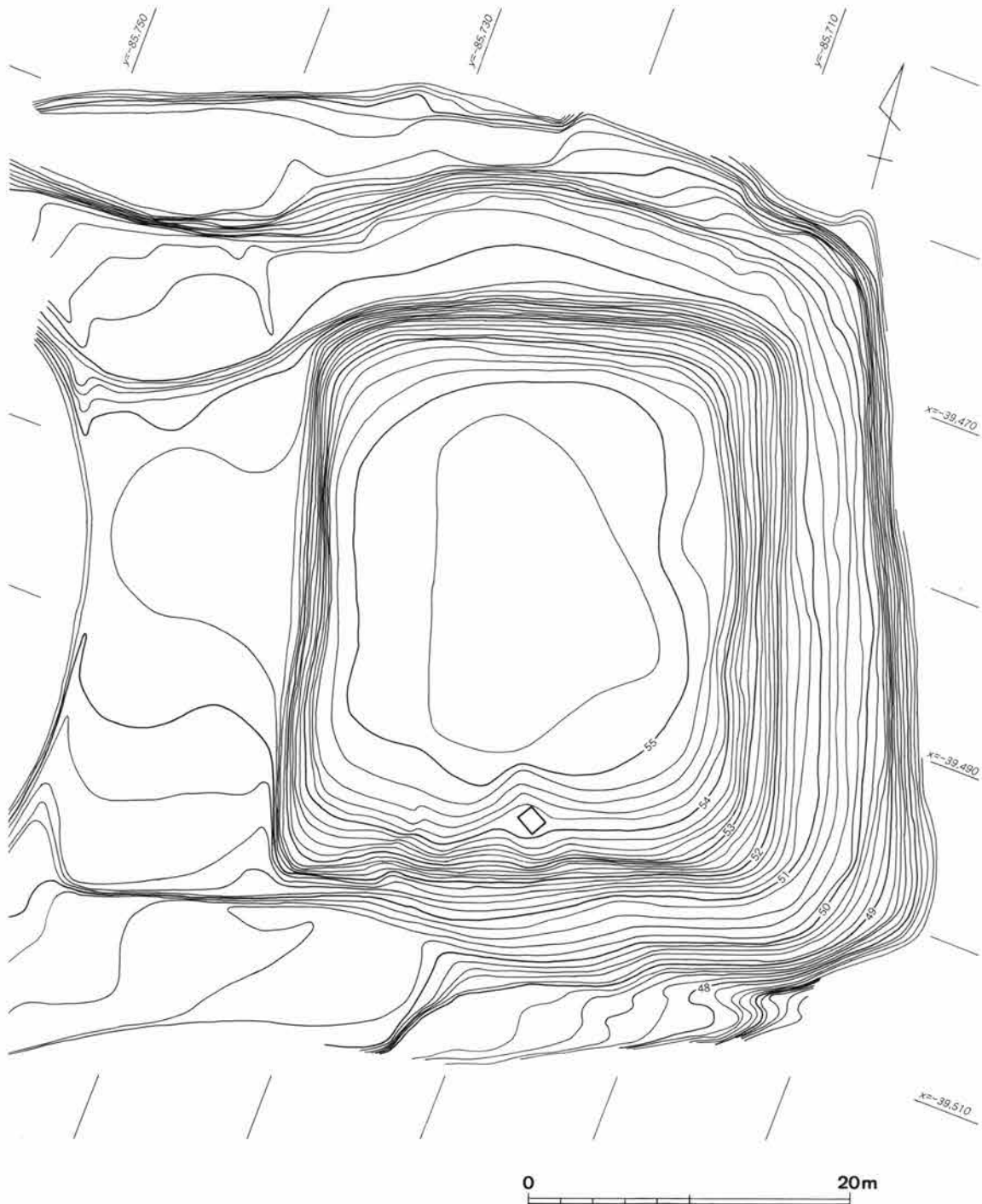
北側墳丘縦断トレンチ 第1主体部主軸延長上北側に設定した墳丘縦断トレンチである。墳丘は、標高54mより上は盛土により構築されていることを側面より確認した。また、標高54m以下は垂直に近く傾斜しており、後世の削平により墳丘が改変されているものと判断された。テラス北端は削平により失われているが、下段テラス部分標高48m付近で、本来のテラス基底と考えられる犬走り状の平坦面を確認した。調査範囲が狭小なため断定することはできないものの、この部位に本来の北側テラス基底を想定したい。

Wトレンチ 墳丘西側堀切部分に設定したトレンチである。墳丘後背部西側丘陵部分は、峰山町有地外のため調査を実施することはできなかった。トレンチの土層は第5図に示すとおりである。中でも第6層は黒褐色粘質土であり、腐植土層が盛土などにより密封された結果、形成されたものと判断される。

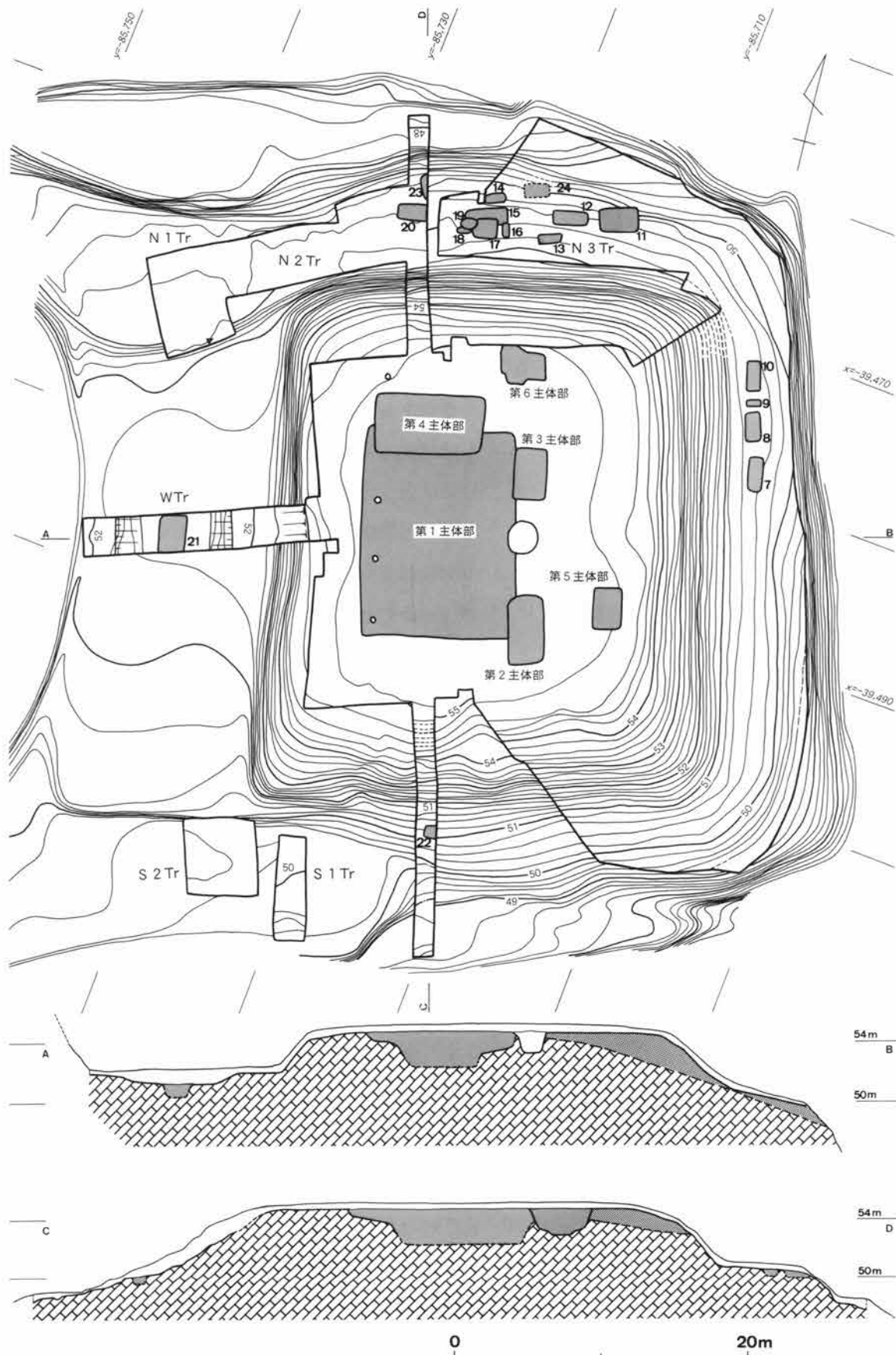
2・4層からは弥生土器のほか、中世に属する土師皿なども出土しており、同層の形成時期は

中世段階になるものと判断する。また、4層直上から掘り込まれるピットを確認しているため、4層は中世山城造成時に盛られた土と見られる。4・5層は墳丘西側部分および後背部丘陵斜面部分を削ることにより形成され、堀切部分を拡張・周辺より一段高くすることにより曲輪としての機能を持たせたものと考えられる。墳丘西側の削平はこの時期に行われたものと判断する。

以上のような状況から、第6層は中世に山城として土地利用される直前の旧表土層と考えられ、墳丘墓本来の基底部分はこの下層に残存しているものと判断された。本来の墳丘基底は地山整形により行われており、丘陵に直交する形で逆台形状の切り離しを設けることにより行われてい



第3図 赤坂今井墳丘墓地形測量図(調査前・1/400・20cmコンタ)



第4図 赤坂今井墳丘墓地形測量図(調査後)および検出遺構配置図・断面図(1/400)



第5図 Wトレンチ南壁断面図(1/80)

る。切り離し部分底面は幅約5.5mを測る平坦面として造成されており、この底面から第21周辺主体部を検出した。墳丘の残存部分は高さ0.4m余りで、約35°の傾斜角をもつ。

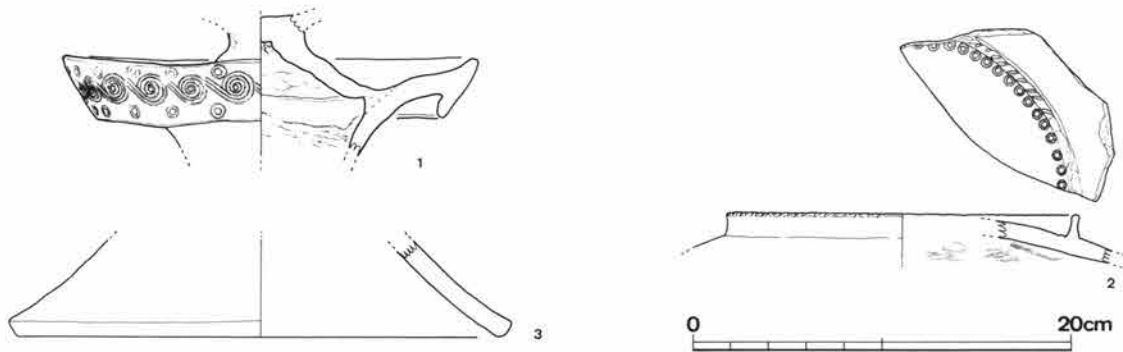
旧表土下部の7～9層は自然堆積層と考えられ、8層は後背丘陵部から、9層は墳丘西側部分が流出したことにより形成された土層であろう。なお、第21周辺主体部はこの8層を切り込んで構築されているため、墳丘完成後、一定程度の時間をおいた後に構築された周辺主体部と判断された。

S1トレンチ 南側テラスの築造時期・造成方法を確認するために設定したトレンチである。北側部分では表土下20cmで地山面を確認した。また、同面からは近世の溝、時期不詳であるがピット・土坑などが確認された。また、地山面はトレンチ南側標高49.8mあたりから傾斜を強め、この斜面部分が本来のテラス南斜面に相当するものと判断された。

S2トレンチ 墳丘南西隅の状況を確認するために設定したトレンチである。この部位では、墳丘隅に相当する遺構などを確認することはできなかった。しかしながら、トレンチ北西から南東へ走る帯状の旧表土層を確認し、その南側は盛土により整形されていることが判明した。

南側墳丘縦断トレンチ 第1主体部主軸延長上南側に設定した墳丘縦断トレンチである。墳頂部付近は大きな株が存在し、掘削することができなかった。また、墳丘斜面部分は里道の造成により削平・改変を受けている。南側テラス部分で1基の周辺主体部を確認することができた(第22周辺主体部)。この周辺主体部の北辺部から、墳丘が立ち上がる状況が確認されたため、本来の墳丘基底は標高50.6m付近と考えることができる。南側テラス南半部分は、里道等による削平が著しく、弥生時代に属する遺構、墳丘墓造成に関する整形面等を確認できなかった。

(石崎善久)



第6図 Wトレンチ出土土器実測図

出土遺物(第6図) 周辺テラス部分の調査ではわずかではあるが、墳丘墓に伴う遺物を検出することができた。その大部分は細片であり原位置を留めていないものと判断された。そのうちWトレンチから出土した3点を図示した。1は9層から出土し、墳頂部からの転落と考える。2・3は中世段階の盛土層から出土した。また、図示していないが角閃石を多量に含む、大形の壺片(図版第27a)と考えられる個体があり、河内もしくは阿讃地域からの搬入品と考える。

1は結合土器である。器台の受け部内面から台付の壺もしくは鉢を作りつけたものと思われる。器台の口縁部は上下に拡張し、口縁外側に渦状のスタンプ紋をめぐらし、その上下に同心円紋のスタンプを施紋する。器台部の受け部内面は横方向のケズリによる調整が施され、その後、脚台部との結合部位に粘土を充填する。外面部分の調整は磨滅が著しく観察できない。器台部の口径は10.4cmを測る。胎土は1～5mm大の長石・石英などの砂粒を少量含む。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。2は壺の肩部片と考える。肩部に刻目を施した高い突帯をもち、その上方に竹管紋を施す。内面に緻密な横方向のハゲが確認できる。突帯上端部での径は14.1cmを測る。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む精良なものである。色調は橙褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。3は高杯もしくは器台の脚部である。下方に向かいやや外反気味に広がり端部に面をもつ。脚接地面における直径は19.8cmを測る大形品である。胎土は微細な長石・石英などの砂粒をごくわずかに含み、精良である。色調は淡橙褐色、焼成はやや軟質である。

(三好 玄)

(2)第4主体部の調査

遺構 第1主体部の北側に構築された、東西方向に主軸をとる木棺直葬形態の主体部である。第2次調査では長軸約4mを測る南北方向の主体部と考えたが、今回の調査により大形の主体部であることが明らかとなった。墓壙は盛土面および第1主体部墓壙を切り込んで構築されており、第1主体部に後出するものである。

墓壙検出段階から、墓壙中央部分に黒褐色系の土色変化が帯状に観察され、また、いくつかの円礫が露出した状態で認められた。この黒褐色系の土色変化は、木棺腐朽に伴う陥没痕と推測され、円礫は本来墓壙上面に存在したものと考えられたため、この部分をまず調査することとした。

木棺腐朽に伴う陥没痕は、人為的な掘形とは異なり、明確な土色変化として認識することは困難であったが、丹念に精査・観察を繰り返した結果、東西3.9m・南北0.9mを測る不整長楕円を

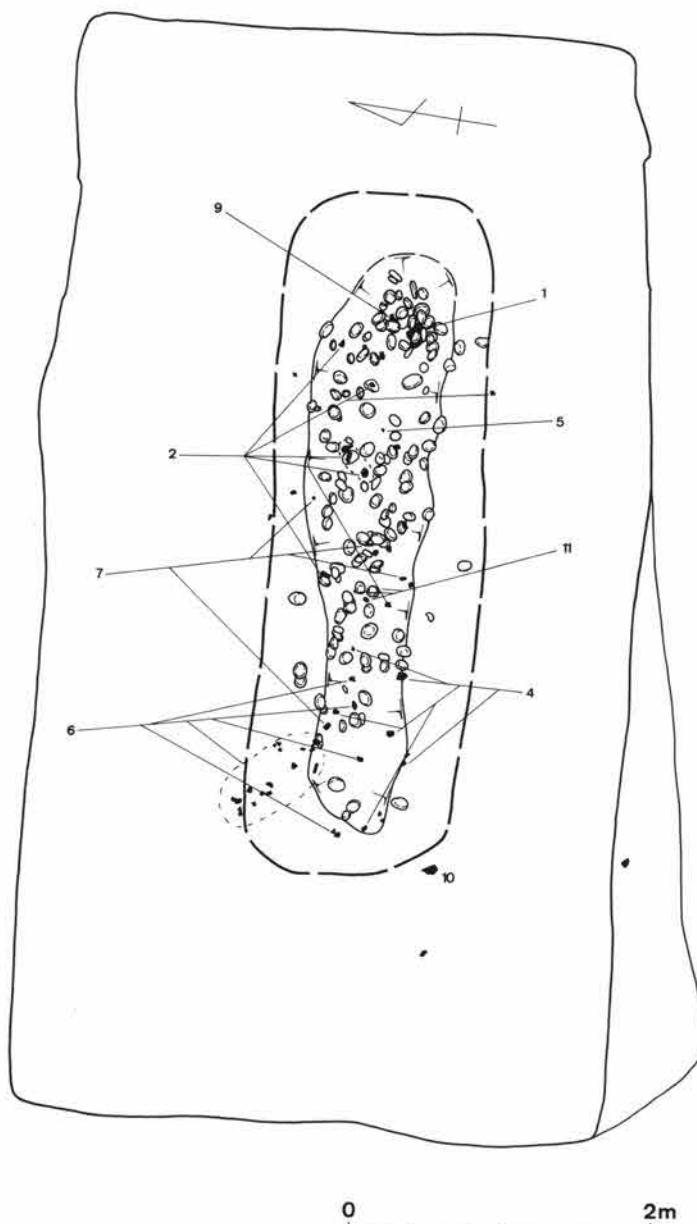
示すことを確認した。

陥没痕内の土層は、大きく4層に大別することができる。この土層の観察結果から、木棺陥没痕の形成過程を復元的に見ると、まず木棺陥没痕が形成され、周辺部の土およびいくつかの円礫が流入する(d層)。その後、北側の墓壙上面の埋土・円礫が陥没痕内に流入(c層)、ついで、南側の埋土がc層の上面に堆積し浅い窪地状の落込みを形成、最終的に、周辺部の土がこの窪地を埋めてa層を形成したものとする。むろん陥没痕内への周辺部の土の流入はその部分によりまちまちであるため、一概に全ての円礫が上記のような状態で落ち込んだとは言い難い。

陥没痕内からは146個の円礫および土器が検出された。円礫はおおむね、北側の方が低いレベルから検出され、南側の方が高いレベルを留めるものが多い。また、東側部分では、重層的に重

なるように円礫が検出されたが、西側部分では円礫そのものの密度が低い。この密度の差は後述する棺内調査の成果から被葬者の頭位を意識しているものとする。これら、円礫を平面的に復原して捉えるならば、およそ、棺とほぼ一致する範囲内に平面的に置かれたと思われる。東側の密度が高いとはいえ、それは山積みにした状況には復原できない。

円礫とともに細片化した土器が出土した。土器はおおむね円礫の上に乗った状態で検出され、本来、墓壙上面に円礫が置かれた後に散布されたものと考えられる。土器は細片化したものが大部分であるが、第12図1・2の2個体のみ大形の破片として検出された。土器の接合状況を見ると、第7図に示すとおり、大きく散らばるものもあれば、比較的まとまりをもって出土して



第7図 赤坂今井墳丘墓第4主体部円礫検出状況平面図(1/50)
(破線は下部で検出した木棺の位置を示す。黒塗りは土器)

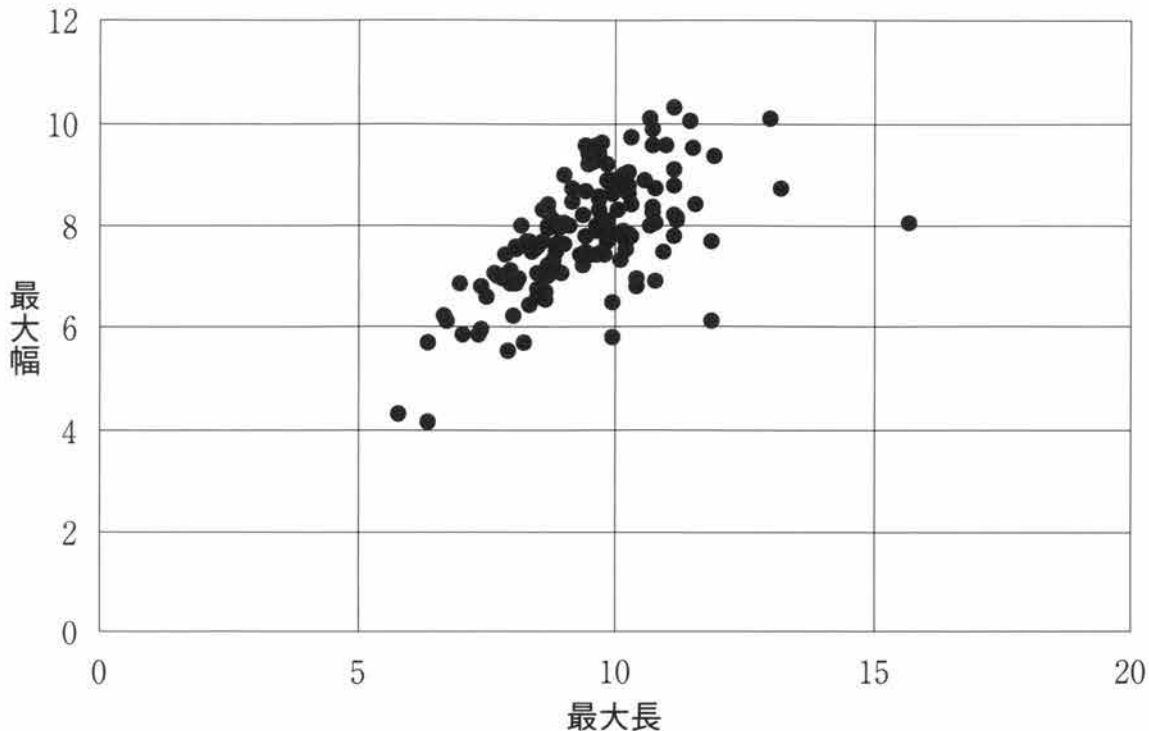
いるものもある。また、第12図1の壺は完周する頸部から上半部分の破片が1点出土したのみであり、体部などほかの部位は認められない。以上のような状況から、第4主体部の円礫上に置かれた土器はほかの場所で打ち割られたもののうち、いくつかの破片を円礫上に散布したものと考える。この状況は墓壙内破碎供献土器とほぼ同様の状況であるといえる。使用される器種は墓壙内破碎供献土器が甕類をはじめとする煮沸具が主体的であるのに対し、本例では壺・高杯・器台といった供膳用具に限定される点異なる。

墓壙上に置かれた円礫は、いずれも表面が磨滅しており、海岸部で採集されたものと推測される。石材は特に限定されておらず、さまざまな石材を用いている。また、法量は第8図に示すように長軸8～10cm・短軸7～9cmあたりに分布の集中するところがあることから、石材により選択したのではなく、法量により選択・採取されてきたものと考えられる。

墓壙上面における陥没痕の調査を終えた後に、墓壙の掘削を開始した。墓壙南西部分はヒノキの根が入り込んでいたため、この部分を、当初、墓壙の輪郭線として掘削したが、約30cm掘り下げた段階で、本来の墓壙の壁面を確認することができた。

墓壙の規模は南北約7.2m・東西約4mを測る。墓壙は変則的な2段墓壙を呈する。第1段目の平坦面は、西側を削り残し、約20cmの段差をもって東側の平坦面に至る。これは第1主体部同様木棺の搬入に際しての機能的側面を重視した結果と考える。第1段目ほぼ中央に穿たれた下段墓壙は、幅約1.7m・長さ約5.3m・深さ0.4mを測る。なお、遺構の破壊を最小限に押さえるため、断ち割り作業については玉類取り上げ範囲に限定し、断面観察もこの部分でのみ実施した。

木棺は、墓壙を約1.5m掘削した段階で、木棺材の腐朽・置換痕跡を確認した。棺材は淡黄灰色系の極細砂を中心とした土壌に置き換わっており、きわめて明瞭に認識することができた。こ



第8図 第4主体部出土円礫法量グラフ

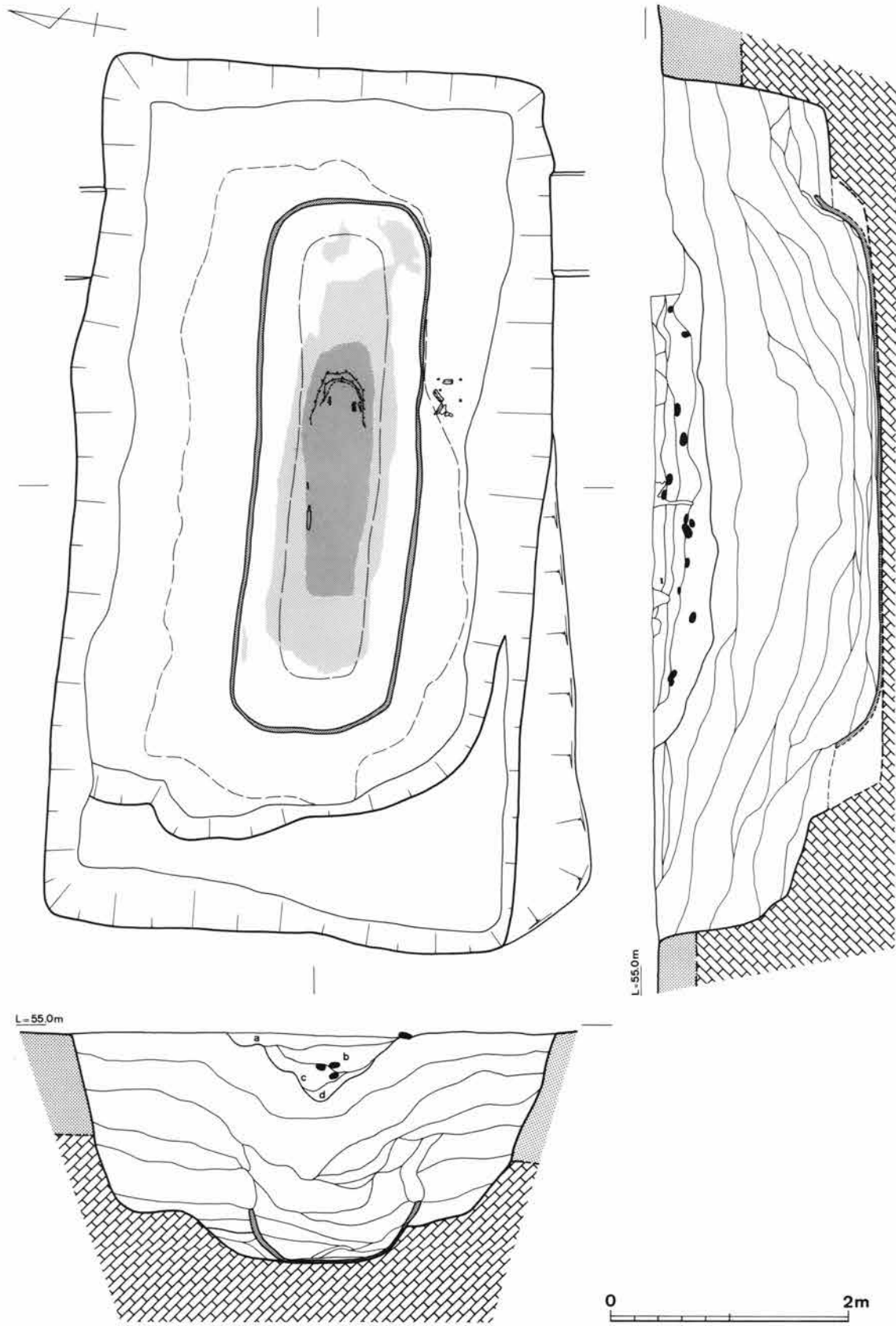
の面は、木棺固定土のさらに1層上面の土層であることがその後の断ち割りによって明らかとなった。棺は両小口の平面・断面とも弧状を呈する舟底状木棺であり、その規模は長さ4.6m・幅1.3m・深さ0.5mを測る。木棺の横断面形は、側板は弧状を呈するが、棺底面はやや水平に仕上げられている。棺内はほぼ全体に薄赤く顔料が塗布されており、この面もしくは淡黄灰色極細砂を検出することにより、棺内埋土が除去できるものと判断された。これは、後の断ち割りによっても確実なことが裏付けられた。また、棺内埋土を除去する過程で、厚さ5cm前後の淡黄灰色もしくは淡青灰色系の粘質土が複数、ブロック状に検出された。これらの粘質土は断面が弧状を呈するもの、薄い板状を呈するものなどが存在し、木棺の蓋材が棺の腐朽に伴い棺内に転落したものと判断する。また、断面弧状を示す部位が存在するので、蓋の形状は棺身同様、舟底状を呈していたものとする。

棺底部中央は幅60cm・長さ2mの範囲に、厚く赤色顔料が敷き詰められており、厚いところで1.5cm程度の顔料の堆積を確認することができた。なお、顔料の塗布部分が内棺に相当する可能性があったため、土層による検証に努めたが、内棺については存在しないという結論に達した。顔料は棺中央の厚く堆積する部分が水銀朱、周辺部分の淡いピンク色を呈する部分が、成分は不明ながら、水銀朱とは異なる顔料が塗布されているものと肉眼観察から考えられた。

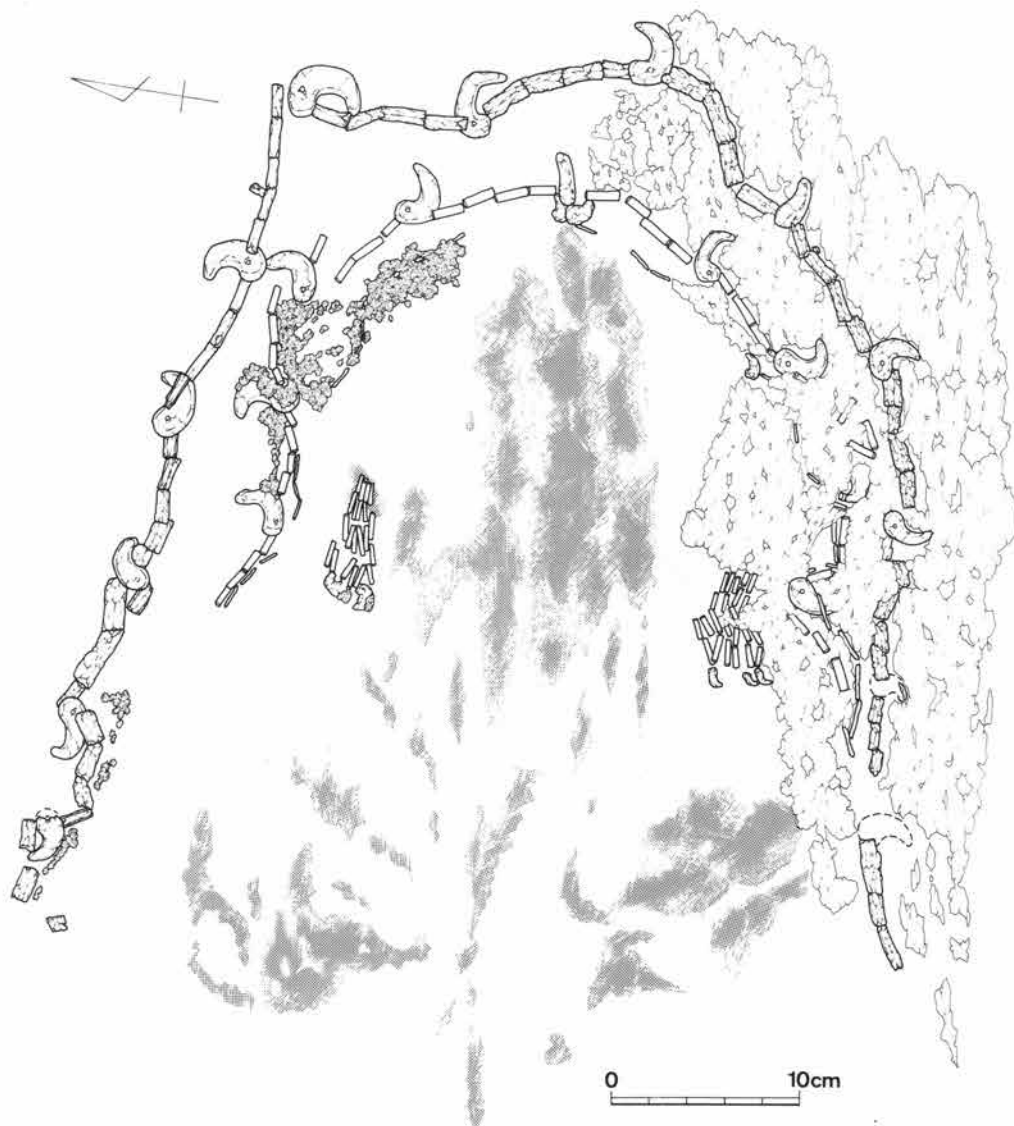
また、水銀朱上には黄褐色を呈する変色部分が認められ、ほぼ人体に合致するような形状を示しており、この部分が人体が腐食した痕跡を示しているものとする。その範囲は全長160cmを測る。また、この黄褐色の変色部分は西側で二股に分かれており、これが、被葬者の下肢に相当するものと判断された。その他、首の付け根部分・肩部など、赤色顔料上に圧痕として残されている部分があり、後述する副葬品の状況から考えても、被葬者は頭位を東に仰臥伸展の体位で埋葬されたものと考えられる。

棺内副葬品は、すべてこの厚く敷き詰められた水銀朱の上面から検出された。その内訳は、東側から玉類、北側板に沿って東から鉈1点・鉄剣1点である。玉類についてはその出土状況から被葬者の頭位に頭飾り・垂飾具として用いられたものが、ほぼ原位置で検出できたものと判断する。頭飾りについては、被葬者に装着状況であったのか、それとも装着状況を模した形で副葬されたのか見解が分かれるところであるが、耳飾りである垂飾具は装着状態を呈していること、また、頭飾りの連が立体的なものからずり落ちたような状況で検出された部位のあることから、被葬者頭部に装着された状態であったものとする。

頭飾り^(注5)は3連の玉類から構成される。外側の連はスカイブルーを呈するガラス製管玉57点と大形のガラス製勾玉13点を使用されている。勾玉と勾玉の間に基本的に4点の管玉を配することにより1連を構成している。また、1点のみであるが北東側でこれらと直交する管玉を検出している。中央の連は碧玉製管玉39点とガラス製勾玉9点により構成される。外側の連と同様、基本的に勾玉間に4点の管玉を配する。内側の連は細身のガラス製管玉31点以上と小形のガラス製勾玉3点以上により構成される。また、この連の先端部分が中央の碧玉の連と接していることから、先端でこの2連が結合されていたものと推定する。玉類周辺には革状の有機質が遺存しているが、



第9図 赤坂今井墳丘墓第4主体部木棺検出状況実測図(1/50)



第10図 第4主体部棺内玉類検出状況(1/4)
(網部は人体腐食痕跡)

これは玉類の上面から検出されており、頭飾りを装着した被葬者の頭位にかけられた面布のようなものかもしれない。なお、この有機質の上にも赤色顔料の堆積が認められた。

垂飾具は被葬者の両耳相当部から一対が検出された。垂飾具は、小形の碧玉製管玉から構成され、北側のものが小形の碧玉製管玉を横に6列・縦に4段を簾状に配し、その先端には小形の勾玉を付ける構造をとる。北側のものが小形の碧玉製管玉を横に6列・縦に5段を簾状に配し、その先端には小形の勾玉を付す構造をとる。また、この垂飾具の上にも赤色顔料が堆積していた。

以上のような状況から、被葬者の安置後、顔に面布状のものを被せ、その上からさらに赤色顔料を置いたものとする。また、有機質等を除去していないため、有機質や赤色顔料の下部にさらに遺物の残されている可能性がある。

その他の副葬品として、被葬者の右腰と棺側の間には切先を頭位側に向けた鈍1点、右大腿部と棺側の間には切先を足下に向けた鉄剣1点が副葬されていた(第11図)。

このほかに墓壙内から甕片が検出されている。甕片は1段目墓壙掘形直上から大形の破片が検

出されたほか、棺内埋土、墓壙埋土内から検出されたが、棺底に密着したものはない。以上の状況から、これら甕片が墓壙内に持ち込まれたのは棺に蓋を行った直後と考える。なお、全ての埋土を棺固定土上面まで除去したわけではないため、未調査部分に甕片が残されている可能性は高い。

なお、玉類については現況のまま、(財)元興寺文化財研究所に依頼し、切り取りによる取り上げ作業を行った。

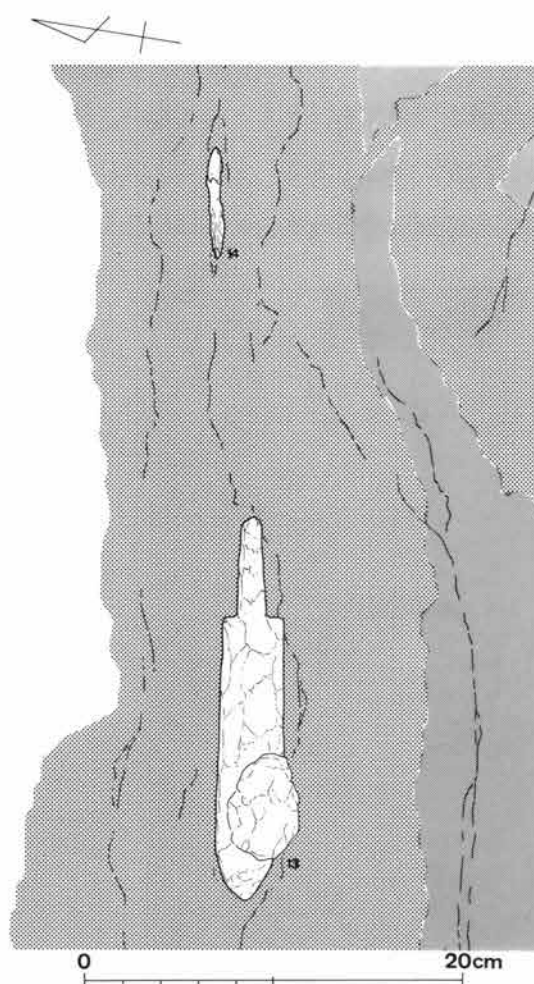
(石崎善久)

出土遺物(第12・13図) 第4主体部出土遺物には、陥没痕内出土の土器、墓壙内出土の土器、棺内出土の鉄製品・玉類がある。このうち玉類については、現在、国立奈良文化財研究所で理化学的分析を行っている最中のため、実測作業等を行っていない。

1～6は壺である。1は口径15.7cmを測る。口縁部は直立する頸部から強く外反する。上下に拡張し、面を持たせた口縁部外側面に擬凹線をめぐらせた後、組紐状の文様を施す。施紋原体は櫛状工具によると思われる。「S」字状の表現を単位

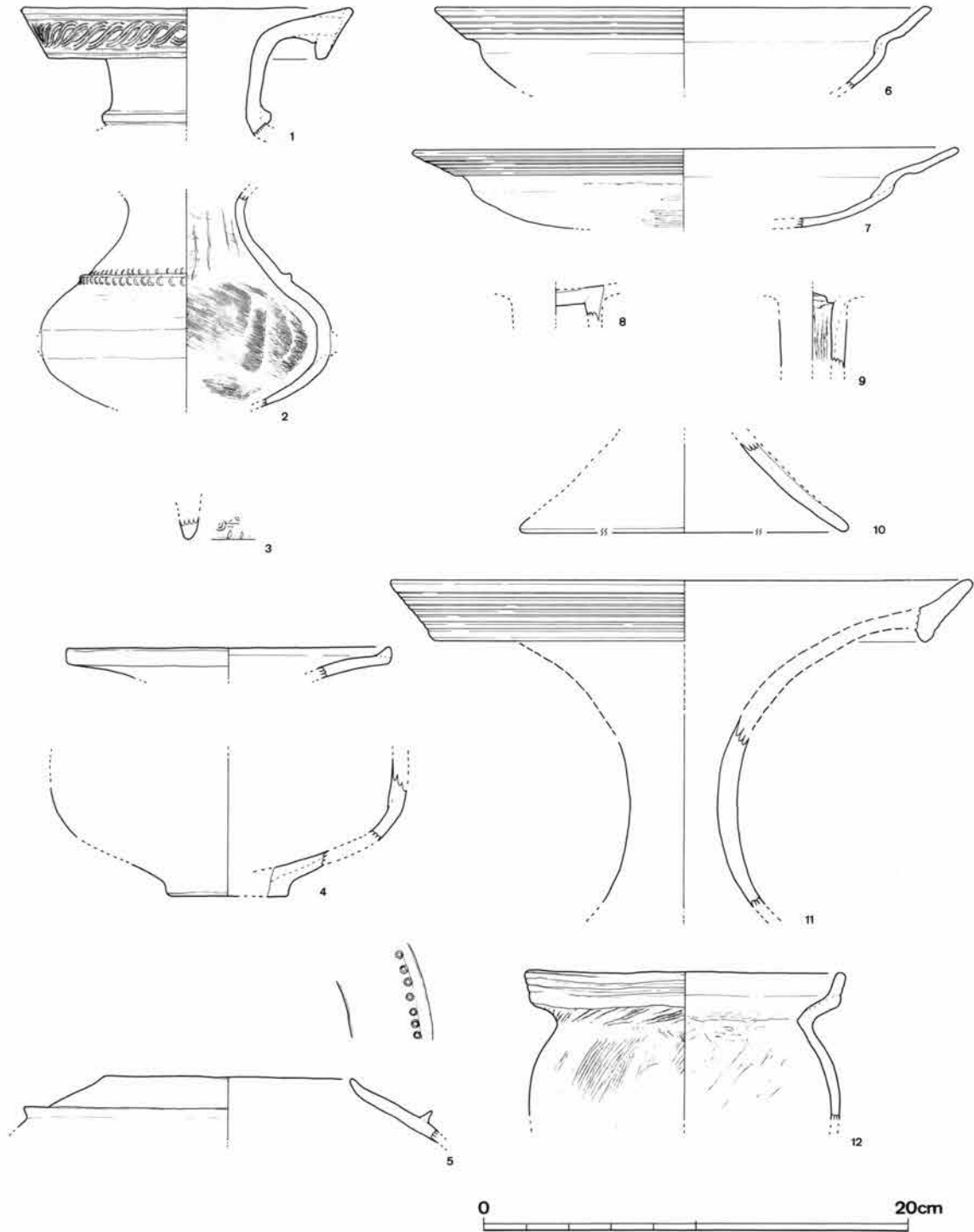
として連ね、あたかも2本の帯状の文様が絡み合っているかのような視覚効果を持つ。頸部と体部の境に突帯を貼付する。頸部外面調整は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによる。胎土は微細な長石・石英をわずかに含む精良なもので、色調は淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。2は体部最大径13.6cmを測る。玉葱形の体部をもち、肩部に低い突帯を作り出す。突帯の上下に半截竹管紋をめぐらす。体部最大径付近に突帯の剥離した痕跡をとどめる。内面には緻密な横方向のハケが確認できる。ハケ後シボリを施し、頸部を成形する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。3は垂下した口縁部である。擬凹線の上に同心円文を施し、下端部を刻む。4は胎土から同一個体と判断した。突出気味の平底を有し、水平に開いた口縁部を上方に拡張する。胎土は微細な長石・石英をわずかに含む。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。5は短頸壺である。口径11.8cmを測る。口縁部より若干下がった部位に高い突帯を貼付し、内側に竹管紋をめぐらす。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は橙褐色、焼成は良好である。

高杯は2個体分が出土した。6は浅い鉢形の杯部から擬凹線を施した口縁部に至る途中で段を持つ。口径23.3cmを測る。7も同様な形態であるが、杯部・口縁部ともに大きく外方に開く。口



第11図 第4主体部鉦・鉄剣出土状況図
(細かい網は人体腐食痕跡・粗い網は赤色顔料)

径25.8cmを測る。8・9は脚柱部片である。内面にシボリ目が観察できる。胎土はともに砂粒をほとんど含まず、淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。10は脚裾部である。6～10は、ともに精良な胎土で砂粒をほとんど含まない。色調は淡橙褐色、焼成は良好である。11は大形の器台である。口径27.6cmを測る。大きく上方に拡張した口縁部・脚柱部ともに厚手の作りである。口縁部外側に擬凹線を施す。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡灰黄褐色を呈し、焼成はやや



第12図 第4主体部出土遺物実測図(1)
(番号は第7図と一致)

軟質である。12は墓壙内に破碎された状況で出土した甕である。口径14.8cmを測る。頸部から強く外反し、上方に立ち上がる複合口縁状を呈する。口縁部外側面に擬凹線を施す。擬凹線は植物の茎枝状の原体で施紋した後、横ナデによって器表面を整える。横ナデの十分に及んでいる部位は、あたかも櫛状工具によって施紋したかに見えるが、不十分な部位には細かく擦れたような痕跡が確認できる。1個体の連続した擬凹線の中で、横ナデの有無によって原体の差異かと誤認するほどの違いが生じている。体部外面調整は、斜め方向のハケによる。屈曲部上方の横ナデの不十分な部位に、ハケ調整に伴うものと思われる工具痕が確認できる。内面調整は、体部をケズリ上げ、屈曲部付近は横方向のケズリによって、厚さを減じる。口縁部内面は、横ハケ後ナデを施す。残存する部位には煤の付着や器壁の赤変は認められない。胎土は微細な長石・石英を少量含む。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。

(三好 玄)

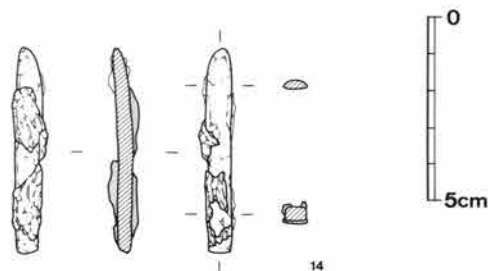
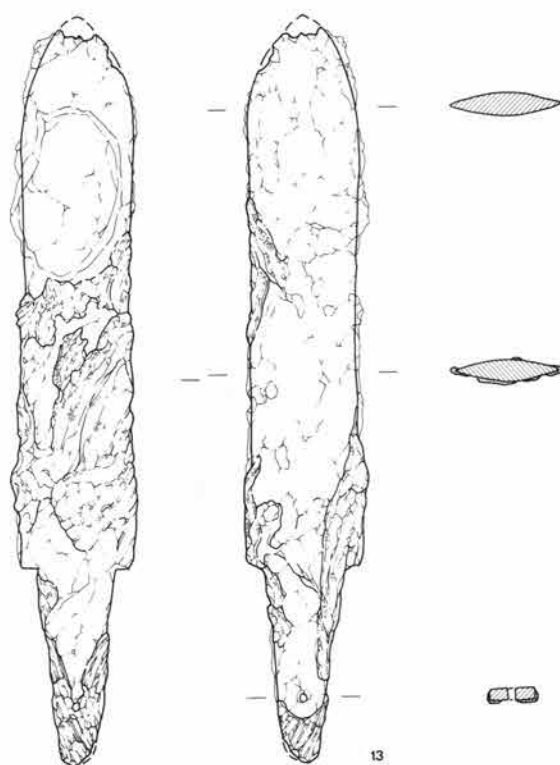
13は鉄剣である。茎部長に比して身部長の短い、当該時期における丹後地域の墳墓副葬品に比較的多く認められる型式である。茎部に目釘孔が1孔認められ、関部は角関、身部に鑄は認められず、断面形はレンズ状を呈する。鋒をわずかに欠損する。残存長19.2cm・身部残存長14.0cm・茎部長5.2cm・身部最大幅3.0cm・茎部最大幅2.1cm・身部最大厚0.65cm・茎部最大厚0.45cmを測る。茎部下端に木質が遺存しており、また、身部から茎部の中ほどまで布痕が認められる。これらの状況から、少なくとも把を装着し、その上から全体に布を巻いて副葬されたと考えられる。

14は鉞である。刃部と軸部との境界が不明瞭な、比較的小型なものである。裏すきは認められず、刃部断面形は半円状を呈する。軸部から刃部にかけてわずかに反りが認められる。全長5.5cm・最大幅0.65cm・最大厚0.4cmを測る。木質が遺存しており、柄を装着した状態で副葬されたと考えられる。

(壺岐一哉)

(3) 第1主体部の調査

遺構 墳頂部中央からやや東寄りに構築された、南北方向に主軸をもつ埋



第13図 第4主体部出土遺物実測図(2)

葬施設である。第2・第3・第4主体部に切られることから墳頂部の埋葬施設の中ではもっとも古いものと判断する。

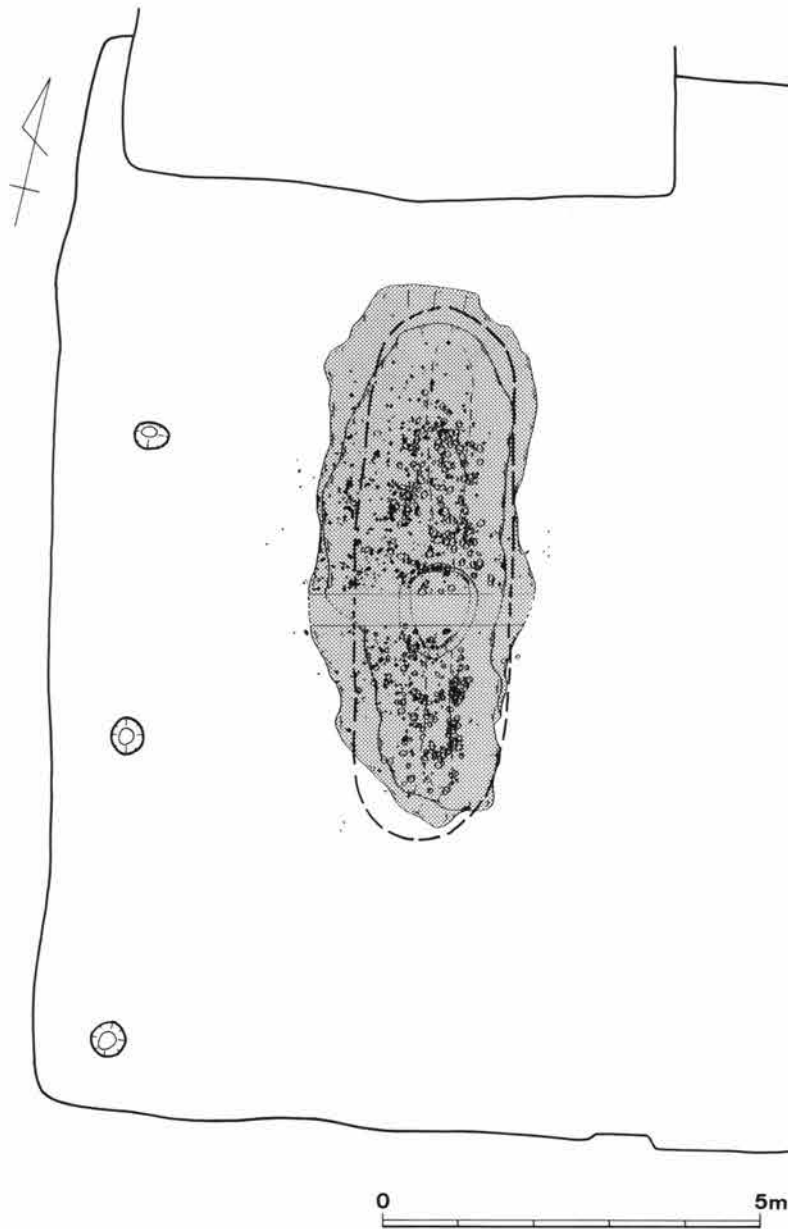
なお、今回の調査では、諸般の事情により未調査部分を多く残すこととなったため、現状で判明していることのみ記載し、課題となる点は今後の調査・整理を行う段階で検討していきたい。

墓壙の精査段階で、墳丘中央に黒褐色土系の土色変化を確認した。これは第4主体部同様、木棺腐朽に伴う陥没痕と考えられたため、まず、この部分を調査することとした。

陥没痕自体は、人為的な掘形を伴うものではないため、その検出作業は至難をきわめたが、丹念に精査を繰り返した結果、南北約7m・東西約2.5mの不整形なプランを確定した。陥没痕内埋土は大きく2層に大別して考えることができる。本来の陥没痕内の埋土と、陥没痕が一定埋没した後に形成された再堆積層である。遺物は再堆積層中から細片化した土器片や少量の円礫が出土し、陥没痕内埋土からは多量の円礫と大形の土器片が出土した。

陥没痕内埋土中における円礫の出土状況を見てみると、ほぼ、本来の面に乗った状態でずり落ちたようなものが多い。円礫はおおむね東側の方が低いレベルで検出される傾向が強く、木棺陥没に伴い、まず、東側の面が引きずり込まれ、この上に西側の面が覆い被さるように落ちたものと推測する。円礫は平面的に置かれたものがずり落ちた状況で検出され、その密度は比較的均一で、第4主体部のように、特定部分に密度の高い部分が、認められるような状態ではない。

陥没痕内埋土中における円礫の出土状況を見てみると、ほぼ、本来の面に乗った状態でずり落ちたようなものが多い。円礫はおおむね東側の方が低いレベルで検出される傾向が強く、木棺陥没に伴い、まず、東側の面が引きずり込まれ、この上に西側の面が覆い被さるように落ちたものと推測する。円礫は平面的に置かれたものがずり落ちた状況で検出され、その密度は比較的均一で、第4主体部のように、特定部分に密度の高い部分が、認められるような状態ではない。



第14図 第1主体部墓壙上陥没痕実測図
(網部分が陥没痕・太い破線は下部で検出された木棺の位置を示す)

土器については現在、接合作業を実施している最中のため、第4主体部のような、ほかで破砕されたものが持ち込まれた。傾向が出るのかどうか、整理作業を終えた段階で検討したい。

また、陥没痕内から1点のみであるが、辰砂と思われる鉱物を検出した。第1次調査で東側テラスから検出された石杵とともに、赤色顔料に関する資料として注目される。この辰砂については、理化学的な分析等を実施しておらず、産地等の同定を行う必要がある。また、陥没痕内から土嚢袋20袋前後の土壌をサンプリングしたので、今後の洗浄・選別作業の過程で辰砂が増加する可能性がある。

また、再堆積土除去後の底面から掘り込まれる土坑を1基検出した。土坑は陥没痕内埋土を切って掘削されており、陥没痕が形成され、一定程度の埋没した後に掘削されている。その位置は墓壙のほぼ中央に位置する。南北方向約1.2m・深さ0.9mを測る円形プランを呈する。また、土坑壁面下部は赤変しており、埋土中に炭と見られる炭化物が多量に含まれているため、土坑内で火が用いられたと判断される。土坑の掘削時期と、第1主体部の埋葬終了段階との時期差についてどのくらいであるかは不明であるが、陥没痕の中心ではなく墓壙の中心に掘削している点を考えれば、この主体部の位置を把握できる段階であったと考えたい。この点から見れば、この土坑の性格を追善供養的なものと考えることが可能ではなかろうか。



第15図 第1主体部墓壙上陥没痕および円磔・土器検出状況実測図
(1/40) (黒塗りは土器を示す。網は赤変部分)

墓壙上面の関連施設として、墓壙西側から柱穴列を検出した。柱穴は第1主体部の墓壙上面で3か所、第4主体部の北側で1か所の計4か所を検出した。規模は、直径50cm前後・深さ40～50cmを測る。柱穴は4m等間で一直線に並ぶ。その方位は、下部で確認した木棺痕跡の主軸方位と一致する。また位置的にみれば、第4主体部上にも本来なら存在するはずであるが、検出することはできなかった。これは第4主体部構築時に柱穴が破壊されたことによるものと判断した。柱穴から柱痕の検出されたものはなく、埋土中から弥生土器片・微量の炭化物が出土している。この柱列は、第1主体部墓壙埋め戻し後に構築され、第4主体部構築時には破壊されていることから、第1主体部墓壙上面における儀礼に伴う柱列と考える。また、第2次調査で検出した竪穴状土坑として報告されている遺構も、土層や位置関係から第1主体部に伴うものであると考える。

墓壙は墳丘盛土面から掘り込まれており、その規模は東西10.4m・南北14mを測る。墓壙の形態は変則的な2段墓壙を呈する。第1段目平坦面は、南側から東へ向けゆるやかなスロープ状に傾斜し、高低差30cm前後のステップを設けて東側の第1段目平坦面に至ることとなる。南側平坦面で標高54.0～54.5m、東側平坦面で標高53.5～53.7m、南側平坦面で標高54.1～54.4mを測る。北側の平坦面については、第4主体部との切り合い関係を残したまま調査を行ったため、詳細については明らかではないが、第4主体部墓壙南壁に示された状況からみると、墓壙主軸の標高約53.9mを最深部に東西からゆるやかに傾斜していく状況が読みとれた。第1段目墓壙のほぼ中心部に構築された下段墓壙は、幅約6m・長さ8.5m以上を測る。こうした墓壙の形状は、棺の搬入に際しての機能的な側面が重視されているものと考えられる。おそらく、木棺は墓壙南側から搬入され、いったん東側平坦面に降ろされた後、下段墓壙内に搬入されたと推測する。その他、第1段目墓壙南西側底部に、溝状に地山を掘削した部分が認められたが、未掘削部分が多く、性格について明らかにすることはできなかった。

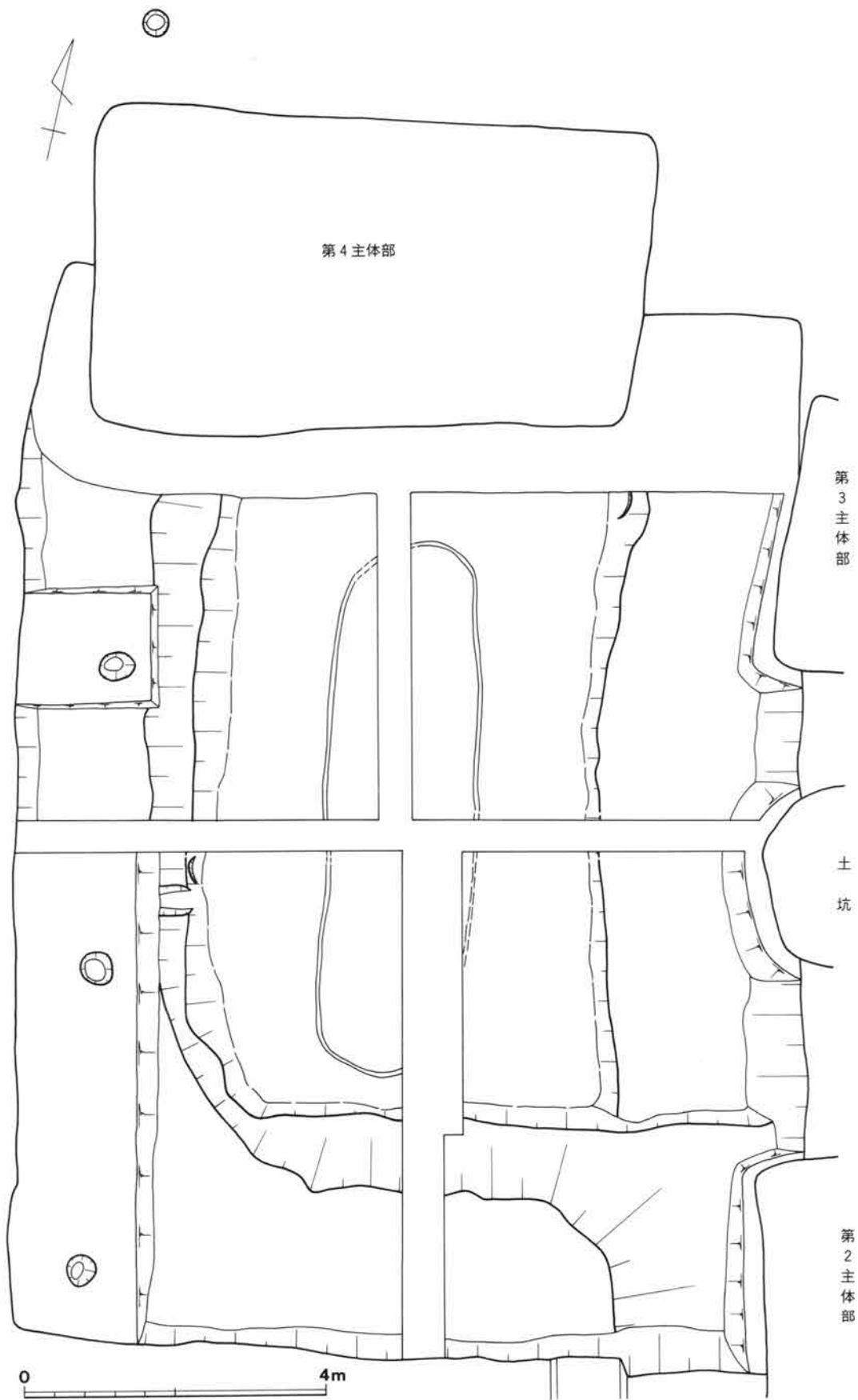
墓壙西埋土中から高杯杯部の細片が1点のみ出土している。明らかに墓壙を埋め戻す過程で入ったものであるが、西側部分は未調査部分が多いため、何らかの儀礼行為に伴うものなのか埋葬以前のものの混入なのか判断することはできない。

棺は墓壙を約1.9m掘削した段階で、棺材の腐植・置換痕と考えられる土壌の変化を確認した。ただし、この検出面は本来の木棺固定土面ではなく、確実性をもたせるため、もう少し掘削して検証する必要性があったが、諸般の事情でこの段階で調査を中止せざるを得なかった。この段階で棺と考えた土色の変化から見ると、長軸約7m・短軸約2mを測り、主軸を南北方向にとる舟底状木棺である可能性が最も高い。

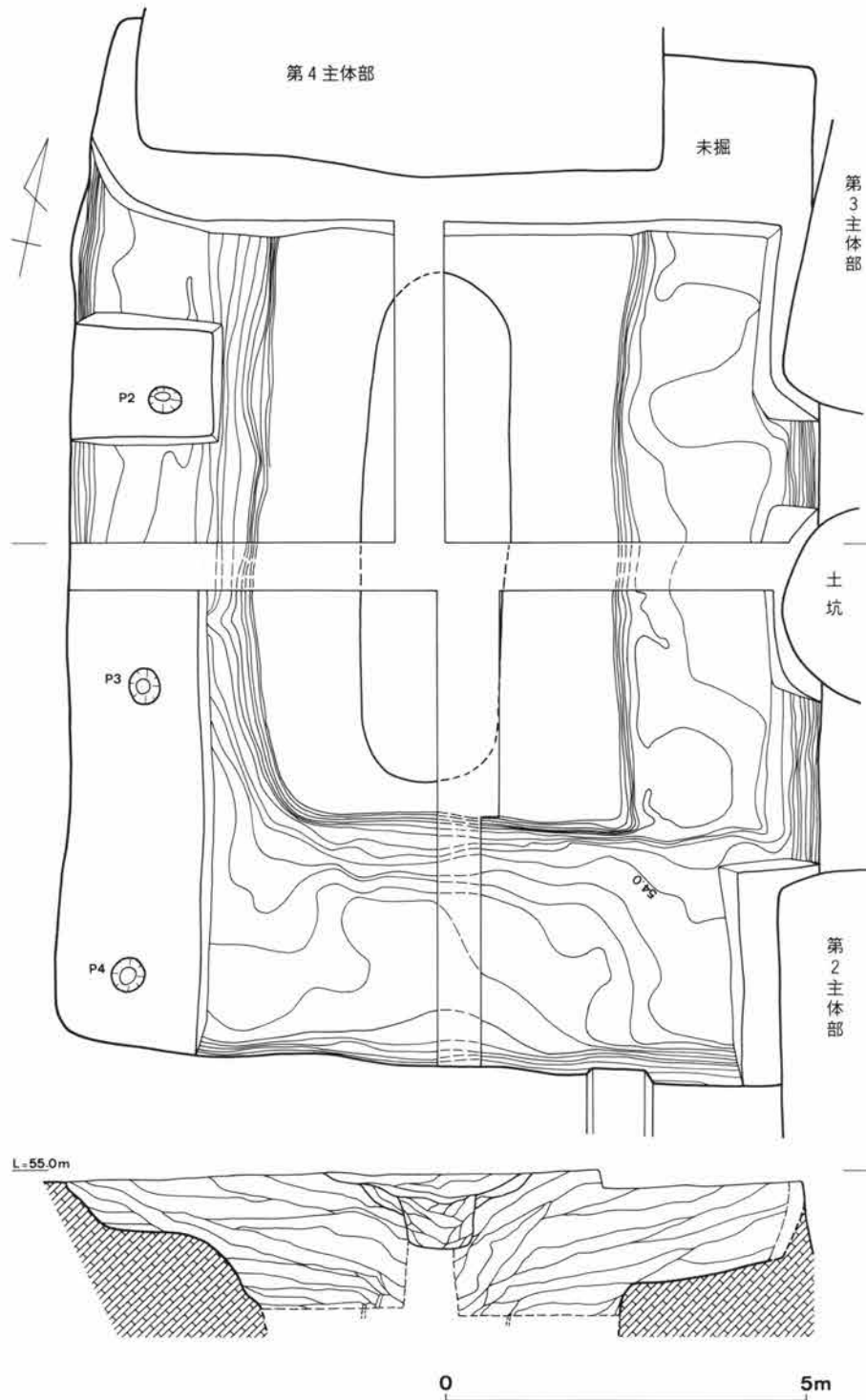
(石崎善久)

出土遺物(第18・19図) 陥没痕内出土の土器・辰砂、埋土中出土の土器、ピット内出土の土器がある。現在土器は接合作業を実施している最中であるため、今回はそのうち特徴的なものを抽出し、掲載した。今回報告する土器についても接合作業終了後に再実測を行い、再報告する。

1～7は壺である。1は頸部径5.6cm・体部最大径18.0cm・底径3.8cm・残存高13.7cmを測る。扁球形の体部に直立する頸部、わずかに突出する底部を持つ。体部外面を縦横の突帯で加飾する。



第16図 第1主体部および柱穴列実測図(1/80)



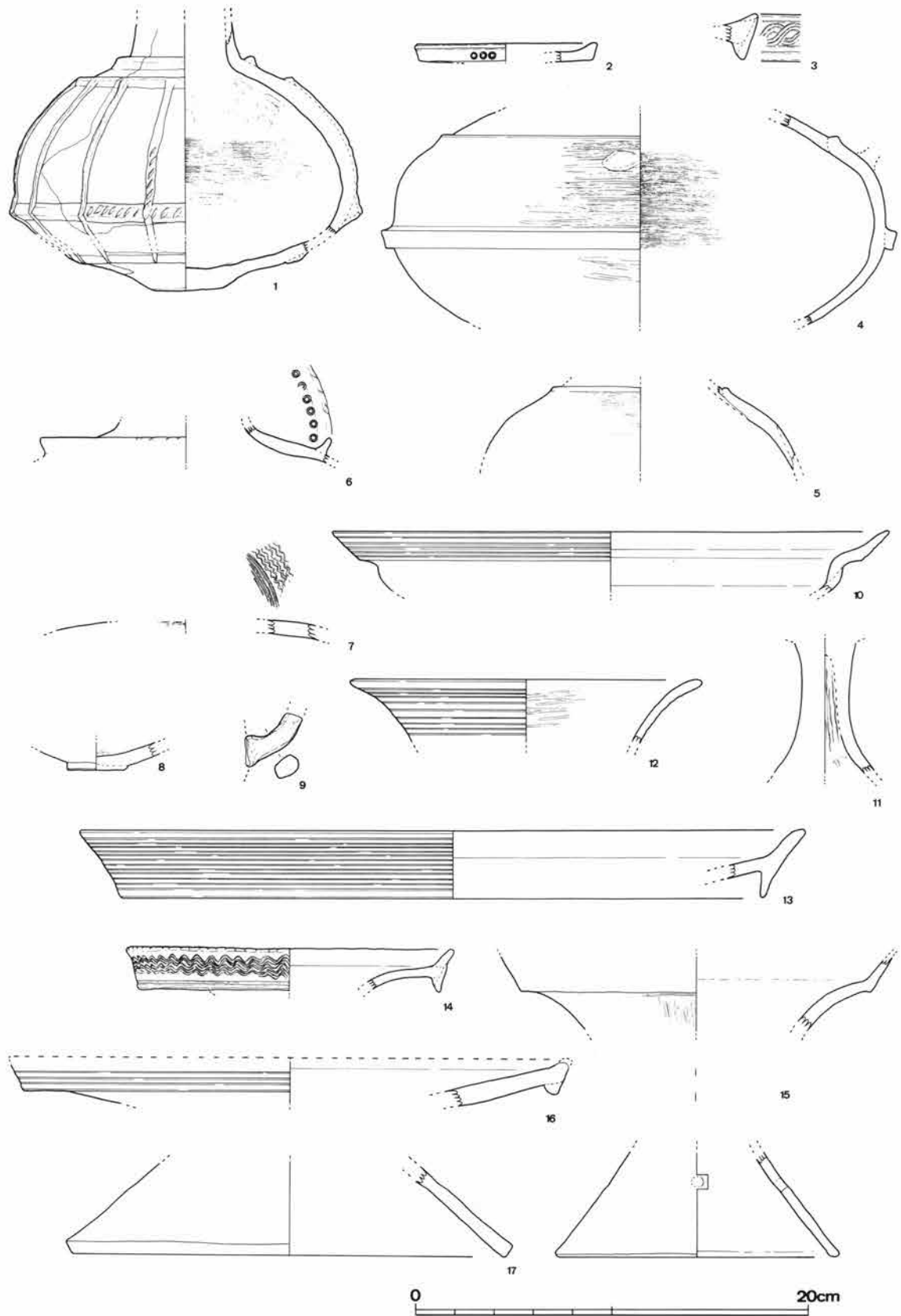
第17図 第1主体部コンタ図(平板実測による10cmコンタ)および土層断面図(1/100)

横方向の突帯を a ; 頸部と体部の境界、 b ; 肩部、 c ; 胴部中位を若干下がった部位、 d ; c と底部の中間の部位、の4か所に貼付する。縦方向の突帯は b ~ d に及び、8本以上を備えたものとする。突帯の遺存状態の良い部分にはキザミ目を確認できる。調整は、外面は磨滅が著しく明らかでないが、内面には指頭圧痕と横方向のハケが認められる。指頭圧痕は器壁の成形に伴うものと、突帯貼り付けに伴うものの2者が考えられるが、その別については判断しがたい。器壁

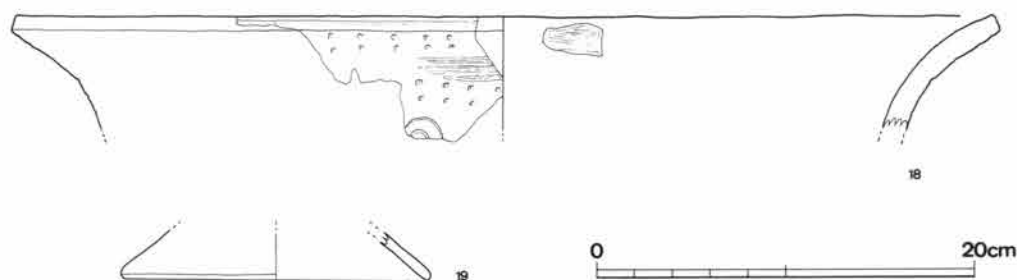
の厚さは、突帯cを境として、以上が7～9mmと厚く、以下が5mm前後と薄い。この部位から体部が屈曲することと併せて考え、突帯c付近に作業工程上の単位を想定する。また、体部中位以上よりも下半が薄くなるという特徴は、当墳墓の扁球形の体部をもつ小・中形壺において通有なものである。胎土は粗く、1.5～2.0mm大の長石・石英をやや多く含む。色調は黄白色を呈し、焼成は軟質である。この器形については、関東に分布が集中する被籠状突帯壺に類するものと考えられる。その特徴的な胎土・色調・器形から搬入品と考えたい。なお、この点については、今後継続して資料調査を行う。2は小形の壺口縁部である。口径9.3cmを測る。外方に向け水平に伸び、端部は若干上方に拡張する。端面上半に一条の沈線を施し、下半に竹管紋をめぐらす。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。類例として、野田川町西谷2号墓や峰山町金谷1号墓から出土した扁球形の体部に短く直立する頸部、平底を持つ小形の壺を考えたい。3は拡張した口縁外面に、組紐紋をめぐらす壺口縁部である。文様・器形ともに第4主体部出土土器(第12図1)と相似する。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。4は強く張った扁球形の体部を持つ壺である。体部最大径は26.0cmを測る。胴部中位に断面方形の突帯を付し、肩部に擬口縁を利用した低い突帯を持つ。肩部に縦向きの取っ手が剥離した痕跡を確認できる。外面調整は横方向のミガキ、内面調整は横方向の緻密なハケによる。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なもので、焼成は非常に良好である。5は壺肩部である。上半に擬口縁を利用した突帯を持つ。外面調整は横方向のミガキによる。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は橙褐色を呈し、焼成は非常に良好である。6・7は壺肩部である。6は薄く高い突帯を貼付する。突帯の端部を刻み、上部に竹管紋をめぐらす。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡褐色、焼成は良好である。7は櫛描き直接紋の下に櫛描き波状紋を施す。同一個体と考えられる破片の中に、頸部突帯を有するものがある。このような施紋を丹後の伝統の中で追うことは難しい。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は淡橙褐色、焼成は良好である。

8は小形の鉢の底部である。底径3.0cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は橙褐色、焼成は良好である。コーヒーカップ形土器と俗称されるものに類する。9は取っ手部分である。器種は明らかではない。胎土は微細な長石・石英をわずかに含む。色調は淡褐色、焼成は良好である。10は大形の有段口縁を持つ高杯である。口径28.4cmを測る。口縁部は大きく開き、口縁部外側に5条の擬凹線を施す。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。11は小形の高杯脚部である。脚柱部径2.4cmを測る。内面にシボリが確認できる。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡褐色、焼成は良好である。浅い鉢形の杯部を備えたものと考えられる。12は器台もしくは壺の口縁部である。口径18.0cmを測る。外側に浅く多条化した擬凹線を施す。内面は横方向のミガキによる。胎土は精良なもので砂粒をほとんど含まない。色調は橙褐色、焼成はきわめて良好である。鼓形器台のような器種の可能性も考慮したい。

13～17は器台である。13は口径36.0cmを測る大形のもので、上下に大きく拡張した口縁部外側に12条の擬凹線を施す。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡灰褐色を呈し、焼成は良好



第18図 第1主体部陥没痕内出土遺物実測図



第19図 第1主体部ピット3埋土出土遺物実測図

である。14は口径17.0cmを測る。水平に開いた受け部から上下に拡張した口縁部に至るまで、薄い器壁を保つ。口縁部外側面下半に擬凹線を施し、上半に櫛描き波状紋をめぐらす。上端部は細かいキザミ目を施す。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡橙褐色、焼成は良好である。器形・施紋ともに丹後の伝統の中で追うことは難しい。15は底径14.0cmを測る。口縁部は複合口縁状を呈す。脚端部は内側に若干肥厚する。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は淡橙褐色を呈し、焼成はやや軟質である。16は口径28.4cmを測る。直線的にのびる受け部から、上下に若干拡張した口縁部に至る。口縁部外側面に擬凹線を施す。胎土は微細な長石・石英を少量含む。色調は淡橙褐色、焼成は良好である。17は脚裾部である。設置部径22.0cmを測る。「ハ」の字状に下方に伸び、端部に面を持つ。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は淡橙褐色、焼成は良好である。

18・19は柱穴3から出土した。18は大形の壺または器台の口縁部である。口径39.6cmを測る。口縁部外側面に2個1対の列点紋を施し、若干下がった部位に同様の施紋を行い、さらに下にヘラ描き紋を描く。残存する部位から判断して、渦状紋と考えるのが妥当であろう。内外面はミガキによって、ていねいに調整される。内面に一部粘土の接合部分から器壁が剥離した部分があり、粘土の接合前に横方向のハケで器壁を整えている様子が看取できる。2は小形の高杯もしくは器台の脚裾部である。設置部径12.2cmを測る。胎土は微細な長石・石英をごくわずかに含む。色調は淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

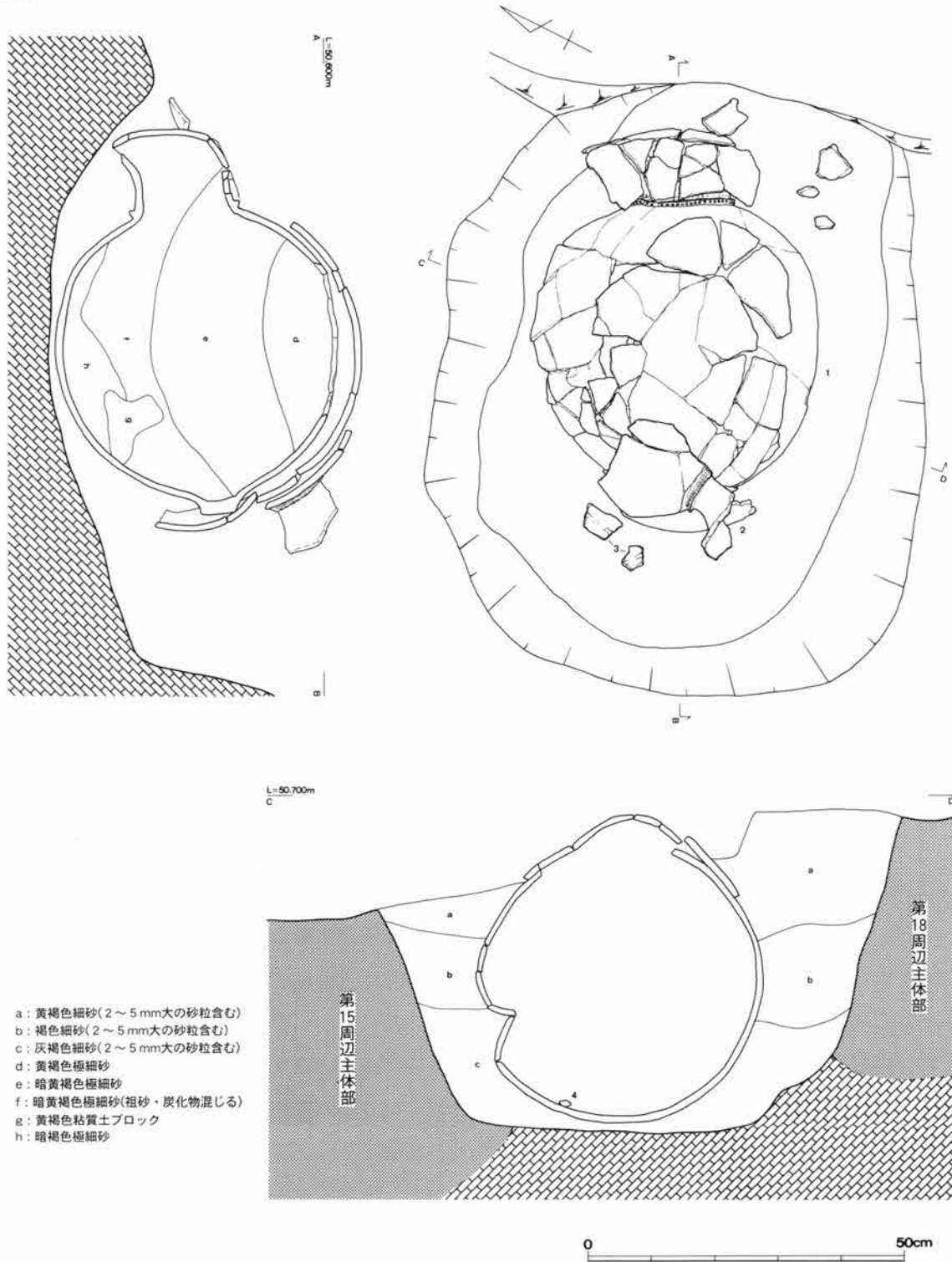
(三好 玄)

(4)第19周辺主体部の調査

今回、行った墳丘の調査において、多数の周辺主体部を確認することができた。内訳については第1表に示すとおりである。そのうち、第19周辺主体部は土器棺を用いており、放置しておけば土器の破損に至るものと判断したため、この周辺主体部についてのみ調査を実施した。

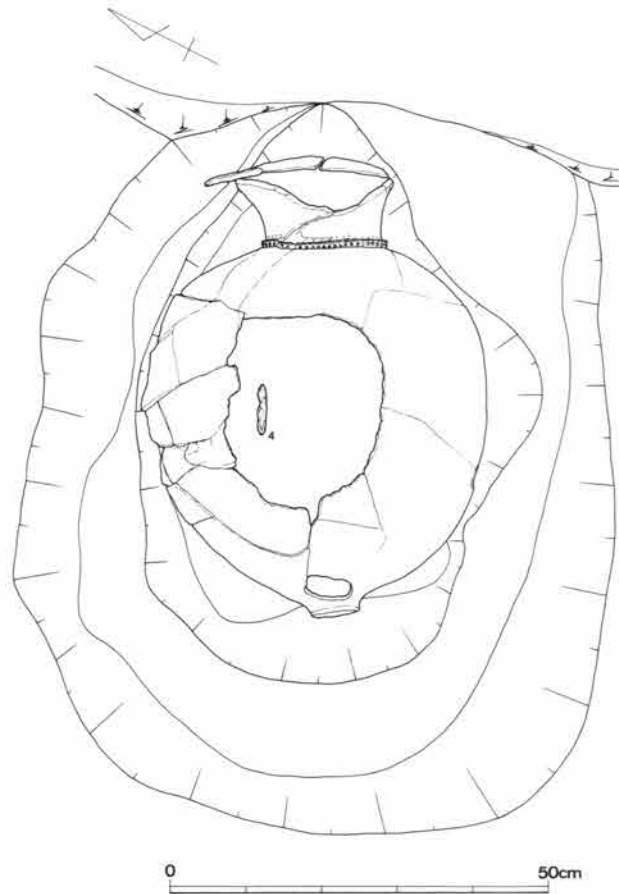
第19周辺主体部は北側テラスにおいて検出した土器を棺に用いる主体部である。第15周辺主体部と第18周辺主体部の墓壙を一部破壊して設けられる。切り合い関係からみて、ともに第19周辺主体部が後の造営である。墓壙は東西に主軸をとり、長軸95.6cm・短軸78.8cmを測る不整形の平面プランを持つ。墓壙の中に大形の壺を横倒しに据え、別個体の壺を破碎して蓋に用いる。使用された土器は2個体である。棺身となる大形の壺1の口縁を水平より6度下方に向けて設置する。1は口縁部が打ち欠かれ、胴部下半に外面からの打ち欠き穿孔が施され、胴部中位に縦

23cm・横22cmを測る大規模な穿孔が行われる。この穿孔は、被葬者の遺体を土器内に納めるための搬入口としての機能を持つと考える。搬入口、胴部下半の打ち欠き穿孔ともに、真上を向いた状態で検出した。蓋については2を6片の破片に破碎して、これに用いる。接合痕から剥離したと考えられる横長の破片2片を用いて1の口縁部と頸部を塞ぐ。胴部下半の穿孔も同様に1片の破片を用いて塞ぐ。この後、2を縦に半截した程度の大きめの破片を用いて遺体搬入口を塞ぐ。



第20図 第19周辺主体部実測図(蓋除去前・1/10)

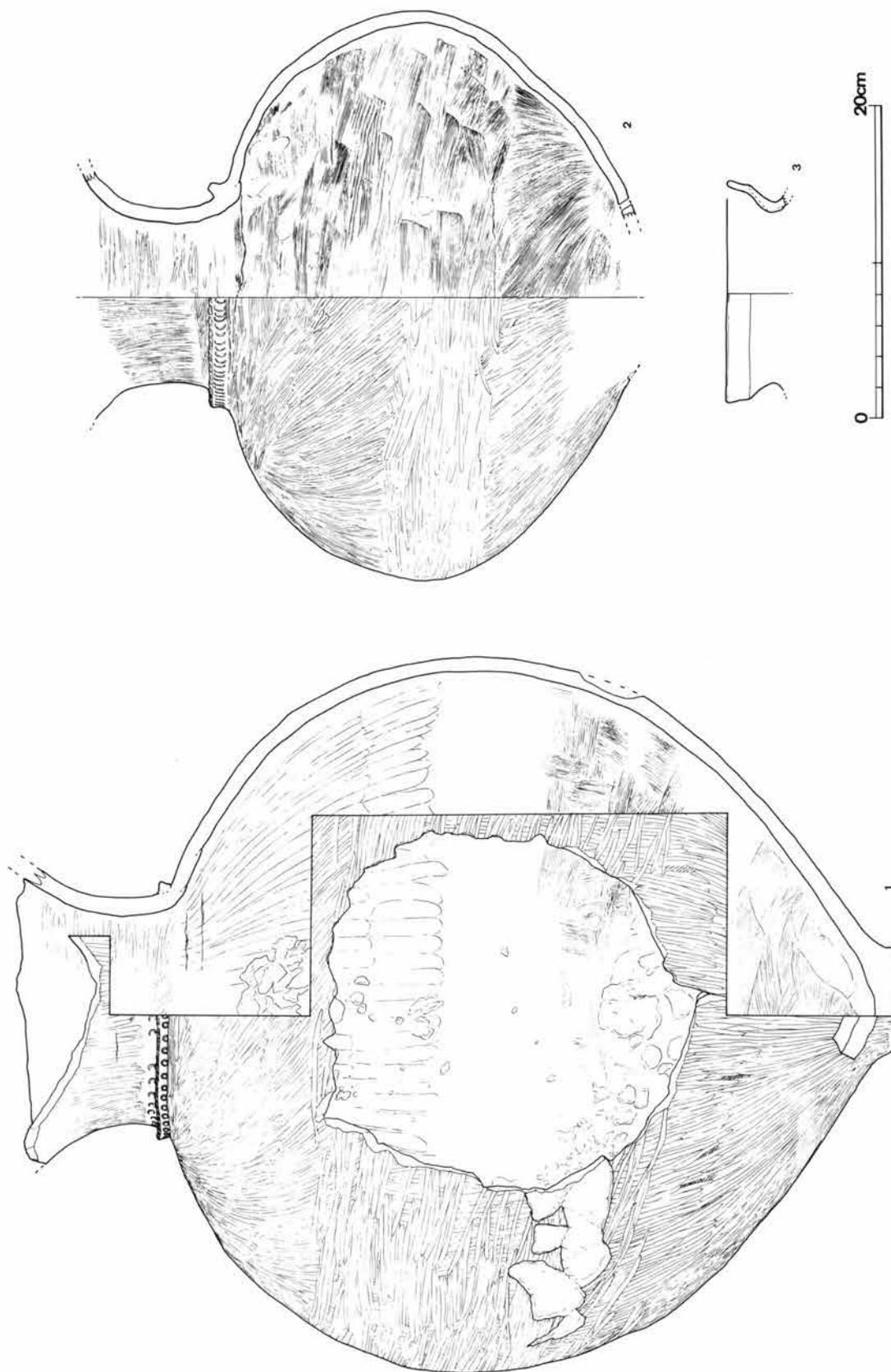
しかる後、頸部以上を含む破片を二重に用いて、胴部下半に重ねる。墓壙の東南、1の口縁部近くで土器片を検出した。これらは全て2と接合したことから、蓋は現地において墓壙を穿った後に破碎したことが理解できる。棺内には蓋の隙間などから入り込んだと思われる極細砂が充満していた。棺内から人骨・着装品の類は出土していないが、鉢4を棺底に密着した状態で検出した。革状の有機物が付着しており、木質の遺存は認められないことから、着柄状態ではなく鉄身部分のみを納めた副葬品である。切っ先は西を向く。1の遺体に接していたであろう棺底となる部分の器壁は、溶けたような独得の器壁の荒れが著しい。墓壙内西側1の底部付近で壺口縁部3を検出した。



第21図 第19周辺主体部実測図(2)
(棺蓋除去後・平面・1/10)

これがこの主体部に伴うものなのか、墓壙掘削時に混入したものなのか判別し難い。

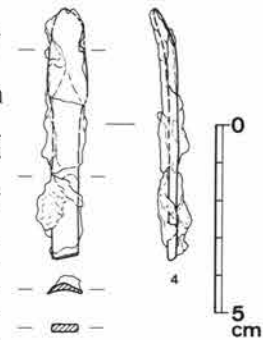
出土遺物(第22・23図) 1は棺身として用いられた精製の大型壺である。頸部径18.1cm・体部最大径46.1cm・底径6.4cm・残存高56.6cm、遺体搬入口は縦23.6cm・横22.2cmを測る。胴部中位に最大径のある球形に近い体部に小さな突出底、ゆるやかに外反する頸部を持つ。頸部と体部の境界に断面三角形の突帯を貼付する。突帯側面に竹管紋、突帯直上に半截竹管紋を施す。外面調整は、頸部に粗い斜め方向のハケの後に、縦方向のミガキを施す。体部下半は縦方向のミガキ、体部上半を斜め方向のミガキで整える。この後に体部最大径付近に横方向のミガキを施す。内面調整は、頸部が斜め方向のハケ後横方向のミガキによる。底部付近に粗い横方向のハケ、体部下半に縦横にランダムな粗いハケを施した後、緻密な横ハケを施す。底部付近と体部下半との中間の部位、体部最大径付近には以上の調整の後、ていねいな横ナデを施す。体部上半は頸部付近までナデ上げられており、それ以前の調整は確認できない。口縁部は頸部途中から打ち欠かれており、どのような形態か明らかでない。底部直上には、外面からの打ち欠き穿孔が施される。体部中位に大きく開口した遺体搬入口は、外面からの打撃によって穿たれている。端部には小さな剝離痕が連なっており、穿孔が慎重に行われたことをうかがわせる。体部中位付近には5~10cm四方程度の剝離痕が点々とめぐる。これが外面からの打撃によって生じたものと考えれば、あるいは当初この壺を上下2分割して棺に用いようとした可能性もある。胎土は微細な長石・石英をわ



第22図 第19周辺主体部出土遺物美測図(1)

ずかに含む。色調は淡褐色、焼成はきわめて良好である。

2は棺蓋として用いられた壺である。土器棺の蓋に用いるために、6片ほどに分割されている。頸部径12.8cm・体部最大径36.6cm・残存高38.4cmを測る。強く張った扁球形の体部にゆるやかに外反する頸部を備える。頸部と体部の境界に断面方形の比較的高い突帯を付す。突帯外側に半截竹管紋、端部にキザミ目を施す。外面調整は頸部が精緻な縦方向のミガキによる。体部は粗い横ハケを施した後に、体部下半に斜め方向のミガキ、その後体部中位に横方向のミガキ、さらに後体部上半に斜め方向のミガキを施す。内面調整は粗い横方向のハケの後に精緻なハケを施す。体部下半は斜め方向に施す。外面においてミガキが縦方向から横方向に変わるのに対応した部位で、斜め方向のハケの上に横方向のハケを施す。上半も同様に横方向のハケが主体となるが、指頭圧痕が集中する。また、底部付近の土器を据えた場合に手前と奥の対応する部位に径4mm程度の小孔を穿つ。補修孔としての機能を想定したい。胎土は微細な長石・石英をわずかに含む。色調は明橙褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。



第23図 第19周辺主体部出土遺物実測図(2)

3は墓壙内埋土より出土した壺口縁部である。口径12.1cmを測る。比較的短く外反した頸部から上方に立ち上がる複合口縁状の口縁部に至る。胎土は微細な長石・石英をわずかに含む。色調は淡灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。

(三好 玄)

4は棺内出土の鉞である。完形品であるが全長6.6cmと短小である。刃部は鋊状を呈し反りをもつ。刃部断面形は裏すき状にわずかに窪み鑄は有さない。軸部は幅0.6cmと幅狭で、横断面は稜のしっかりとした長方形を呈する。軸部から刃部にかけての厚みの変化はほとんどなく平面的である。また、軸のつくりは厚さ0.2cmと薄手である。木柄の付着は認められず、革状の有機物が身部側端などに付着していることから装具を着けずに副葬されたものと考えられる。丹後地域のみならず全国的に同時期のほかの資料と比較しても小振りであるといえる。

(中川 和)

6. ま と め

今回の調査によって明らかになった点をいくつか列記し、そこから派生する問題点について若干の整理を試み、まとめとしたい。なお、出土遺物の整理作業や理化学的分析作業が終了していないため、これらの諸点を含めた報告作業は今後、報告書作成の段階で実施することとする。

a. 墳丘の復原 第1・2次調査の成果や、今回の墳丘の調査概要で述べたとおり本墳丘墓は方形の主丘部とその四周をめぐるテラス部により構成される。また、Wトレンチの成果により、墳丘斜面の傾斜角は斜度35°前後を測るものと判断された。この斜度を手がかりとして墳丘基底部の復原を行いたい。

Wトレンチでは基底部分は明確であり、標高51.4m付近を主丘部の基底と見ることができるといえる。

第1表 赤坂今井墳丘墓検出主体部・周辺主体部一覧

No	墓壇				棺				出土遺物		
	形態	長軸	短軸	深さ	形態	長軸	短軸	深さ	墓壇上	墓壇内	棺内
墳頂部											
1	2段墓壇	14	10.5	1.8以上	舟底状木棺?	7	2	不明	円礫・土器・辰砂	土器	不明
2	2段墓壇	4.5	2.4	1	舟底状木棺	3.4	0.9	0.36	なし		ヤリガンナ1
3	2段墓壇	3.5	2.3	1.2	箱形木棺	1.8	0.5	0.4	なし	土器	ヤリガンナ1
4	2段墓壇	7	4.2	約2	舟底状木棺	4.4	1.3	0.5	円礫・土器	土器(破砕)	玉類(頭飾り・垂飾具)・鉄剣1・ヤリガンナ1・有機物
5		2.8	1.85								
6		3	1.8								
東側テラス											
7	素堀墓壇	2.3	1	1.1	箱形木棺	1.8	0.45	0.25	土器片		短刀1・鉄鏃1・ヤリガンナ1
8	素堀墓壇	2	1	1.1	舟底状木棺	1.7	0.47				ヤリガンナ1
9	素堀墓壇	1.1	0.52	0.35	土壇墓						
10	素堀墓壇	2.1	0.9	0.45	箱形木棺	1.7	0.4		土器片		赤色顔料
北側テラス											
11	2段墓壇	2.6	1.8	0.6	箱形木棺	1.8	0.6				ヤリガンナ1
12	2段墓壇	2.4	1.4	0.45	箱形木棺	1.8	0.55			土器(破砕)	
13	素堀墓壇	1.75	0.63	0.4	土壇墓						
14		1.1	0.6								
15		2.6	1.1								
16		1.1	0.5								
17		1.5	1.3								
18		1	0.5								
19	2段墓壇	0.9	0.8		土器棺					土器片	ヤリガンナ1
20		2以上	1.1								
23											
24											
西側テラス											
21		2.8以上	2								
南側テラス											
22		1以上	1								

南側墳丘縦断トレンチでは、第22周辺主体部のすぐ北側から墳丘斜面が立ち上がる状況が確認できるため、この地点を主丘部南側の基底とすることができる。

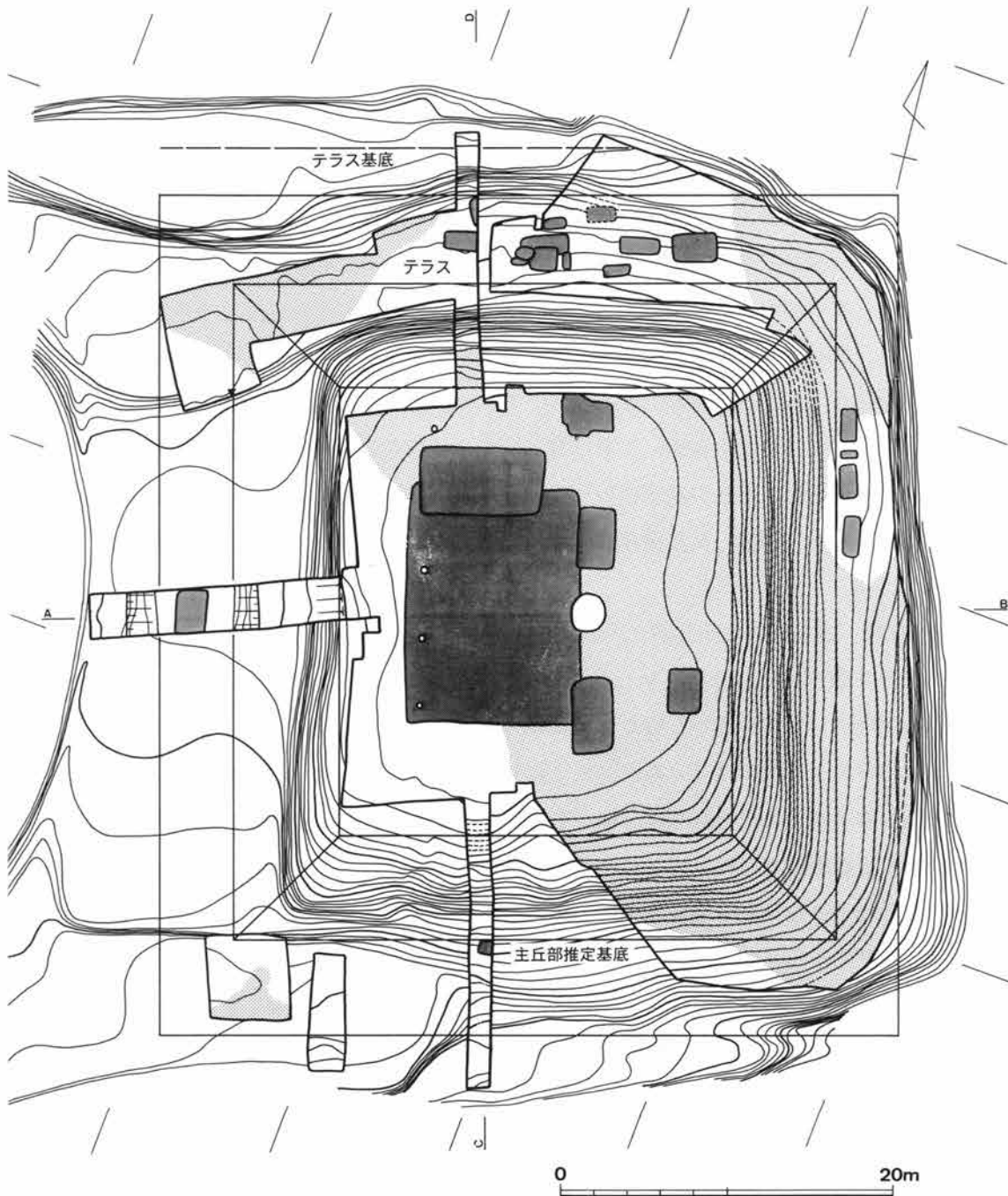
Nトレンチは墳丘基底部の削平がもっとも著しく、現状での傾斜角度は約50°と急峻であり、本来の墳丘のあり方を示しているものとは思えない。仮に西側主丘部斜面同様、傾斜角35°で主丘部を復原した場合には第13周辺主体部南辺付近を主丘部北辺の基底に想定することができる。

主丘部東側基底部分は現状では標高51m部分で傾斜変換点が認められる。この場合、現状で遺存する墳丘盛土と傾斜変換点を結ぶラインを主丘部東斜面と想定した場合、その斜度は40°を測ることとなり、ほかの部分に比して急峻な傾斜を呈していたこととなる。主丘部東部分は大部分が盛土地業により構築されているため、地山整形による部分より風化による墳丘の流失が著しいと思われるため、この部分のみほかの斜面に比して急峻であったとは考えがたく、やはり35°前

後の傾斜角をもっていたものと考えたい。その場合、主丘部東基底部分は標高約50.7m付近に相当し、第7～10周辺主体部の西側近辺に想定することができる。

以上のように主丘部を復原した場合、その基底部分における規模は、南北約39m・東西約36mを測ることとなる。その高さについては現状の標高55m付近を墳頂部に想定した場合

周辺テラス部分については先に示した墳丘基底で計測すると、現況で西側で幅約5.5m・標高51.4m、北側で幅約5m・標高50.8m、東側で幅約4m・標高50.7m、南側で幅約7m・標高50.5mをそれぞれ測る。周辺テラスが削平を受けている点を考慮するならば、本来、標高51m付



第24図 赤坂今井墳丘墓墳丘復元図(粗い網部は盛土)

近をテラス平坦面と考えるのが妥当であろう。

テラス裾部分の処理については、今回の調査では北側トレンチの標高47.8m付近で本来のテラス基底部分と考えられる地山整形痕を確認することができた。北側テラス平坦面との比高差は約3mを測る。また、テラスも盛土地業により造成されている部分が認められる点を考えると、明確な基底部をもつ可能性が高いと判断する。今回の調査では、テラス基底部分については調査範囲が狭く、その詳細を明らかにすることはできなかったが、北側墳丘縦断トレンチの成果から標高47.8m付近を北側テラス部分の基底と考えておきたい。

以上のように、赤坂今井墳丘墓は、高さ3m前後、平坦面での南北51mを測る土壇の上に、南北約39m・東西約36m・高さ約4mを測る主丘部がのる形態に復原できる(第24図)。

墳丘の築造方法については、盛土部分の断ち割りを実施していないため不明瞭な部分があるが、地山整形と盛土とを併用して行われている。盛土の平面的分布状況(第24図)を見てみると、墳丘の東部分にはほぼ全面盛土作業が施され、西側部分は全て地山整形により行われている。一方周辺テラス部分にも盛土が使用されている部分が認められる。西側の切り通し状に整形された面から発生する土量は単純計算で推定2,500m³を測り、仮に1人1日1m³の土が動かせるという現在の土木基準を当てはめれば、切り通し部分の整形だけで2,500人工の労働力が必要とされることとなる。また、墳丘北側テラス・南側テラスも地山を整形することにより行われており、ここにも地山掘削を行う人員が投入されたであろう。これらの排土が墳丘部分や周辺テラスの盛土に利用されたと考えられ、排土の運搬、整形作業にはさらに多人数の就労者が必要とされる。このように、赤坂今井墳丘墓は墳丘の造成を行うだけで多大な労働人口を必要とし、単一集落のみでの造成を考えるよりも、複数の集落構成員の共同作業により築造されたものと判断する。

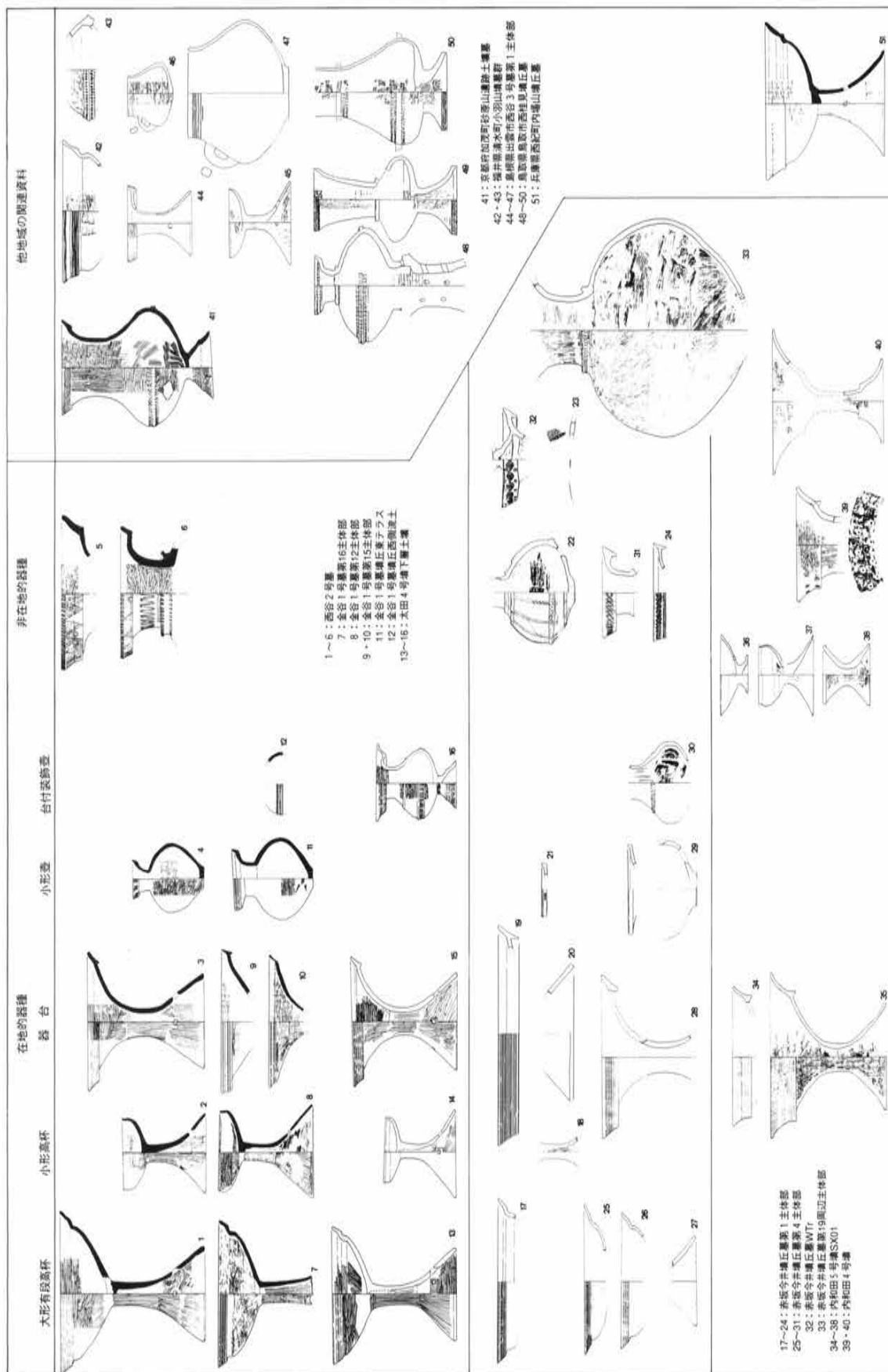
(石崎善久)

b. 造墓時期 墳丘墓の造墓時期についてであるが、何度も繰り返すように第1主体部の土器は現在接合作業中であり、今回提示したものは断片資料を図示したものである。しかしながら、おおむねの傾向については提示し得たものとする。

丹後地域の弥生土器編年は『京都府弥生土器集成』に提示されたものをはじめ、石井清司・肥後弘幸・高野陽子^(注6)がそれぞれ編年案を提示している。これらの作業の結果、細かい点を除いて丹後の後期弥生土器編年はほぼ完成されつつあるとあってよい。この中でも、墳墓出土資料を中心に扱った高野陽子の編年案は完成度の高いものとする。

今回は、高野陽子が後期Ⅳ期・庄内Ⅰ期としてあげた墳墓出土資料との比較を通じ、その相対的な位置づけを試みたい。赤坂今井墳丘墓出土土器の特色として、在地的な器種と非在地的な器種が混在する。そのうち、在地の器種について丹後地域内での編年的位置づけを明らかにしたい。

大形有段高杯の形態ではⅣ期のものは、口径に比して、杯部高が高いため、杯部が深い印象を受ける。口縁部は急角度で立ち上がるものの、大きく外傾することはない。脚部は脚高の高い内湾する脚部を有し、施紋方法において、口縁外側面には明瞭な擬凹線を施す。対して赤坂今井墳丘墓出土資料は、口径に比して杯部高が低いため、杯部が浅い印象を受ける。また、口縁部は大



第25図 弥生後期から庄内併行期墳墓出土土器(S=1/5 48~50のみ1/10)

大きく外傾する。口縁外側面の擬凹線は明瞭である。脚部は墳丘周辺部分から出土しているものを見る限り、脚高が低く、外反気味のものが多い。

小形高杯は赤坂今井墳丘墓で存在は確認できるが、詳細は不明である。

Ⅳ期の器台は、口縁部の形態は、上方に大きく拡張し、下方への拡張はわずかである。金谷1号墓例のように下方に拡張しないものも見られる。受け部から脚部にかけての器壁の厚さは均一であり、受け部高に対し、脚高が高い。脚部は大形有段高杯同様、脚高の高い内湾する脚部を指向する。口縁外側面の擬凹線は明瞭である。一方、赤坂今井墳丘墓出土資料は口縁部は上下とも大きく拡張し、下方への拡張部位が厚い傾向が見られる。器壁の厚さは脚部へ向かい、厚みを減じている。脚部は、脚高が低く、やや外反気味であり、脚端部に面をもつ。口縁外側面は多条化した明瞭な擬凹線を施す。

小形壺は、Ⅳ期のものが体部上半に最大径を有し、やや肩の張った扁球形を呈する。底部は平底である。口縁部は比較的広い面をもち、直立気味に立ち上がる。施紋は口縁外側面に擬凹線を施す。赤坂今井墳丘墓では口縁部の立ち上がりが短く、口縁外側面は無文もしくは竹管紋を施している。また、底部はやや突出気味の形態を示す。

台付装飾壺は大きな形態的变化は見られないが、施紋方法が竹管紋と半截竹管紋という差異が認められる。なお、この点については赤坂今井墳丘墓出土土器特有のあり方かもしれない。

一方、庄内Ⅰ期に位置づけられる墳丘出土資料では、比較検討できるものが少ないものの、器台において、口縁上方への拡張がさらに大きくなり、それに伴い擬凹線の多条化がいっそう進行している。施紋方法では擬凹線の消失したものも見受けられる。器高に対する受け部高は比率を増し、脚部は矮小化し、脚端面も丸みを帯びた貧弱なものとなっている。

全体的な器種構成についてみると、Ⅳ期のものが、在地的器種が主体を占めるのに対し庄内Ⅰ期のものは非在地的なものが主体を占めている。赤坂今井墳丘墓はⅣ期のものより非在地的なものが増加しているが、庄内Ⅰ期のものよりは比率が低い。

以上、概観したように、赤坂今井墳丘墓出土土器は個別の様相や全体的な様相において、後期Ⅳ期から庄内Ⅰ期の過渡的な様相を示す土器群として捉えることができる。

また、他地域の墳墓から出土する土器を見てみると、後期Ⅳ期では山城・山陰・北陸地方などに丹後との関連をうかがわせる土器がある。なかでも、鳥取県西桂見墳墓出土の結合土器と、赤坂今井墳丘墓出土の結合土器は、形態こそ異なるものの、共通する思想的背景のもとに生み出されたものではないだろうか。^(注7)

このように赤坂今井墳丘墓出土土器は弥生時代後期末に比定され、他地域との交流を示すものが多いが、その出自、系譜などについては今後引き続き検討していきたい。

(石崎善久・三好 玄)

C. 赤坂今井墳丘墓出現の背景 これまで、墳丘形態・築造時期を検討してきた。その結果、赤坂今井墳丘墓は弥生時代後期末葉に築造された大形方形台状墓であることを確認できた。細部については未検討の部分もあるが、この墳丘墓の被葬者像について考えてみたい。

『和名類聚鈔』によると、丹後国の田積は4756町であり、隣接する但馬7555町・丹波(京都)7063町に比して可耕地の面積が狭い。10世紀前半のこの資料が、どの時代にまで遡って各地域の可耕地面積を表わすかは不明であるが、それにしても、可耕地面積が少ないことは十分予測される。すなわち、赤坂今井墳丘墓を造営し得た集団の経済的な基盤が、水田耕作など農耕基盤に求められる可能性は低いものと推定される。では、その他の要素とはなにを考慮すべきであろうか。

野島 永は日本各地から出土する弥生時代鉄製品を集成し、その流通をモデル化する試みを行っている。その分析の結果から、丹後に鉄(鉄製品)が集積され再配布されるターミナル的な性格がある可能性を指摘している^(注8)。また、奈具岡遺跡の調査から中期段階で鉄素材の再加工を行いうる素地が丹後にあったことが明らかとなっている。

福島孝行は銚子の副葬状況を検討し、朝鮮半島洛東江流域の墳墓との親密性を指摘する^(注9)。筆者もまた刳拔系の舟底状木棺の祖形を朝鮮半島に求め、移入者としての棺形式である可能性を考えた^(注10)。このように丹後の鉄製品は、朝鮮半島からの鉄素材あるいは製品の直接的な入手を考慮してよいと思われ、その背景には渡来人の存在をみてとることができる^(注11)。

こうした物流を維持・管理するためには一定のシステムが必要であり、システムの管理者が必要とされる。また、対外的な交渉を行う際の語学力・交渉力・航海技術さえも必要とされたであろう。赤坂今井墳丘墓第1主体部の被葬者は、この物流を管理する人物そのものであり、ほかの弥生墳墓の被葬者はそのシステムを支え、機能させる立場にあったのではないだろうか。そして、その紐帯は方形墳丘・舟底状木棺といった墳墓様式に象徴されるものと思われる。舟底状木棺の被葬者は鉄剣の保有率が高く、箱形木棺を採用する集団とは異なる性格をもつものと考えられる。一方、従来の方形墳丘(もしくは無墳丘区画墓)・箱形木棺といった墳墓様式を踏襲する集団も丹後には存在している。この2つの集団が混在し、融和している点が丹後弥生後期社会の特色とみることができよう。一方、出雲を中心とした山陰地域では、四隅突出墓・木槨木棺墓といった墳墓様式が政治的紐帯を示すものとして巨大墳墓に採用されている。この墳墓様式は若干の変容はあるものの、北陸地域にまでその分布圏を広げ、丹後は四隅突出墓の空白地域と見られていた。今回の赤坂今井墳丘墓の調査成果は、この状況を改めて裏付けることとなった。さきにみた丹後の墳墓様式はひとつの「クニ」としての紐帯を示すものとして理解することが可能と言えよう。

赤坂今井墳丘墓出土土器を再度みてみると、在地以外の要素として、他地域の影響を受けたもの、あるいは搬入遺物が認められる。高野陽子の指摘通り後期後半段階以降、丹後の弥生土器は排他的な状況を示しているが、赤坂今井墳丘墓は地域を越えた交流を示しているといえよう。このような状況が、大形墳墓に特有な現象であるか、あるいは時期的に交流が活発化するために生じた現象であるかは第1主体部棺内調査の成果、類例の増加を待ち検討したい。

第4主体部は第1主体部に後出する副次的な主体部とみられる。棺や墓壙上祭祀のあり方は、第1主体部と共通する部分が多く、被葬者は第1主体部被葬者の近親者と考えられる。この主体部に副葬されていた遺物は玉類・鉄剣1振・銚子1点であった。丹後では玉類が多く副葬される傾

向が強い点が指摘されるが、後期後半段階ではその大部分はガラス小玉であり、第4主体部のようにガラス管玉を多量に使用した例はない。また、ガラス勾玉の点数も現在知られる国内の弥生墳墓の中で最多出土例となる。玉類の入手経路についてはその素材等の分析を終えてから行いたい、この頭飾りは日常的に装着していたものとは考えがたく、儀礼の場で装着する性格のものと思われる。

以上みてきたように、赤坂今井墳丘墓は丹後に分布する方形墳丘・舟底状木棺を採用する墳墓の頂点にたつ墳丘墓と見ることができる。副次的な主体部である第4主体部にさえ、類例のない副葬品が納められている点や、墳丘墓造営に投入された労働力から見ても、複数集落の協業により造墓された丹後地域の中核的墳墓の一つといえる。また第1主体部の長大な舟底状木棺はホケノ山古墳など畿内の出現期前方後円墳(前方後円形墳丘墓)に採用される木棺との関連性をうかがうこともでき、前方後円墳の創出に丹後の「クニ」が関与している可能性も考えることができる。しかしながら、中心主体部である第1主体部の全容の解明されない現在、その権力・経済基盤については推測の域を越えるものではなく、将来的な調査の成果をまって再度検討したい。

(石崎善久)

7. お わ り に—今後の展望—

赤坂今井墳丘墓の立地するすぐ横には、府道網野・峰山線が敷かれている。この道は現在も幹線道路として交通量が多い。それは生活道路としての利用のみならず、物資運搬のトラックや観光シーズンともなれば大形観光バスの通行も多く、地域の大動脈として位置づけられる道である。しかしこの墳丘墓の周辺においては道幅が狭く、交通安全の面において地元地区住民からも問題点が指摘されていた個所であった。今回3次を数えることになった赤坂今井墳丘墓の調査は、この道に伴う交通安全施設の設置を契機として調査が行われた。しかし、その重要性が明らかにされるとともに、工事範囲の変更などの保存に向けての協議を重ねた結果、保存が決定され、峰山町当局において現在までに用地買い上げを終了することができた。関係者の多大な努力に感謝する次第である。埋蔵文化財は貴重な歴史的資料の一つであり、文献資料ではうかがい知ることのできない行為を文字通り「モノ」で現在生きる私達に示してくれる物であることは言うまでもないことである。しかしそれだけでなく、その場所・立地について、所によっては神社などが後世に建てられ、その地域にとっては一つのシンボルとして認識されてきたものもあり、現在までの歴史的経過が重みをもつものの中には生まれてくる。この経過を持つがゆえに地域に親しまれてきた遺跡もあり、このことは今後の遺跡の保存活用を考える上で重要な要素となり得るものであると考えられる。

峰山町は豊かな自然とともに文化財が多く残されている地域であり、その特性を生かした積極的活用が一つの課題とされていた。遺跡の活用については現在もさまざまな視点から各地で取り組みがなされており、その方法についても慎重な議論が必要であろうが、周辺環境と調和した「地域で守る文化財」への整備が求められていると言えるのではないだろうか。

今回までの3次にわたる調査によってその様相が明らかになり、丹後における弥生時代の象徴的な遺跡の一つであることが分かってきた。その成果を受け、この原稿を執筆している現在、峰山町当局においても史跡整備に向けて、基本構想の立案、更なる追加調査の実施などの検討に入ったところである。保存が決定した赤坂今井墳丘墓を史跡整備するために解決しなければならない課題はまだまだ多くあるが、この遺跡が「地域に根付いた遺跡」として、峰山町における史跡整備のモデルケースになればと願うものである。しかし現在はそのための取り組みについてもその緒についたばかりのところである。更なる関係者各位のご指導、ご協力を得て、良い整備が行われることを願って、筆を置きたい。



第26図 頭飾り・耳飾り復原図
(沓岐一哉画)

(岡林峰夫)

主要参考文献

- 広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』（季刊考古学・別冊10 雄山閣） 2000
 田中義昭ほか『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』（島根大学法文学部考古学研究室） 1992
 加悦町教育委員会『丹後の弥生社会を斬る』（第4回加悦町文化財シンポジウム資料 加悦町教育委員会） 1998

注1 今回の調査において、小野山節氏より遺構名称を全て「主体部」と呼ぶのは妥当ではないのではないか。という指摘がなされた。確かに、本墳丘墓の場合は、明らかに墳頂部に存在するものと、周辺に位置するものの格差が明瞭であり、峻別のしやすい状況を示している。しかし、丹後の弥生墳丘墓全てが同じ状況かというところではなく、中心的存在の明確でないものや、中心にありながら副葬品が他の被葬者に劣るものなどその存在のあり方は多様である。逆説的にいえば、全ての被葬者の状況を把握してこそ、「主体」的なものと、「従属」的なものにはじめて分類ができるものと考えられる。本稿ではこの指摘を十分鑑みた結果、墳頂部にある被葬者を埋葬するための遺構を「主体部」、周辺のテラス部分に位置するものを「周辺主体部」と呼称することとした。なお、遺構番号については、第1・2次調査との整合性を重視し、従来の番号を踏襲することとした。

注2 黒坪一樹ほか「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第92冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2000

注3 以下の関係諸機関、個人からさまざまなご協力、ご教示を得ることができた（順不同・敬称略）。

京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・国立奈良文化財研究所・文化庁・赤塚次郎・赤澤徳明・荒木幸治・前坂尚志・藤田憲司・高橋克壽・福海貴子・石川日出志・山川均・武田佐知子・川上洋一・忽那敬三・高田健一・光本 順・中條英樹・今尾文昭・村上恭通・辻信広・石野博信・木下 亘・山中 章・濱野俊一・西村公助・鈴木雅美・渡辺貞幸・水野敏典・榊原小葉子・森岡秀人・金子裕之・林部 均・岡林孝作・深澤芳樹・劉 振東・山田隆一・高田浩

司・佐古和枝・木場幸弘・寺澤 薫・神野 恵・石橋茂登・古川 登・森 浩一・広瀬和雄・都出比呂志・樋口隆康・佐原 眞・門脇禎二・瀬戸谷皓・谷本 進・三浦 到・佐藤晃一・加藤晴彦・横島勝則・丸山次郎・白数真也・橋本勝行・阪口英毅・大賀克彦・広瀬時習・近澤豊明・三好博喜・吹田直子・壱岐一哉・石井智大・福辻 淳・土屋みづほ・古川 匠・中川 和・三好 玄・村上計太・欄宜田佳男・清水眞一・萩原儀征・橋本輝彦・鈴木一有・森下章司・清家 章・玉城一枝・一瀬和夫・堀 大介・豊岡卓之・沢田正昭・肥塚隆保・高妻洋成・高木清生・西藤清秀・吉村和昭・大西貴央・米川祐治・大久保徹也・橋本輝彦・青木勘時・小池香津江・渡辺 昇・森下大輔

注4 墓壙上の円礫は丹後では大風呂南1号墓(白数真也・肥後弘幸ほか「大風呂南墳墓群」(『岩滝町文化財調査報告書』第15集 岩滝町教育委員会 2000))に類例が見られるが、どのような状況であったかは復原不可能である。また、墓壙上礫出土墳墓を集成した大谷晃二氏によると、類似する形態のものが中国山間部に存在する(近藤義郎ほか『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤寺山弥生墳丘墓発掘調査団 1995)。

注5 本来なら、頭飾り・耳飾りについて復原的考察を行う予定であったが、紙幅の都合で割愛せざるを得なかった。この点に関しては素材や、類例調査を通じて改めて検討するが、現状では第26図に掲げるように復原できるものと考えている。

注6 a. 高野陽子「弥生大形墳墓出現前夜の土器様相」(広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣) 2000

b. 野島 永・高野陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注7 清水眞一氏のご指摘による。

注8 野島 永「弥生時代の対外交易と流通 -弥生墳墓の副葬鉄器を通して-」(広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣) 2000

野島 永「鉄器からみた諸変革 -初期国家形成期における鉄器流通の様相-」(『シンポジウム記録2 国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会委員会編) 2000

注9 福島孝行「弥生墳墓における鉈の副葬作法について(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注10 石崎善久「弥生墳墓の構造と変遷 -舟底状木棺を中心として-」(広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣) 2000

石崎善久「舟底状木棺考 -丹後の刳抜式木棺-」(『京都府埋蔵文化財論集』4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注11 肥後弘幸氏は丹後の鉄剣出土量の多さから、その背景に軍事集団の存在を予測している(肥後弘幸「弥生王墓の誕生 -北近畿における首長墓の変遷-」(広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣 2000)。しかしながら、その出土状況は刀装具をもたず、抜き身を布・革巻きで副葬する事例が多く、威信財もしくは辟邪的な意義で副葬された可能性を考慮すべきであり、軍事と直結させるには議論が必要である。また、大風呂南1号墓第1主体部から出土している鉄剣の大部分には刃関双孔があるが、このタイプの鉄剣は他の弥生墳墓から出土しておらず、大風呂南1号墓第1主体部の被葬者から他の墳墓の被葬者への配布がなされたという図式は単純には成立しない。

圖 版

図版第1 赤坂今井墳丘墓第3次



(1)調査前近景(南西から)



(2)調査前遠景(南から)

図版第2 赤坂今井墳丘墓第3次



(1)調査前遠景(北から)



(2)調査後全景(上空から、上が西)

図版第3 赤坂今井墳丘墓第3次



(1)調査後遠景(上空から、東から)



(2)調査後全景(上空から、東から)

図版第 4 赤坂今井墳丘墓第 3 次



(1)調査後全景(上空から、北から)



(2)調査後全景(上空から、南から)



(1)Wトレンチ近景(北東から)



(2)S-2トレンチ全景(北東から)



(1)南側墳丘縦断トレンチ全景(北から)



(2)N-1~N-3トレンチ全景(西から)



第4 主体部全景(西から)



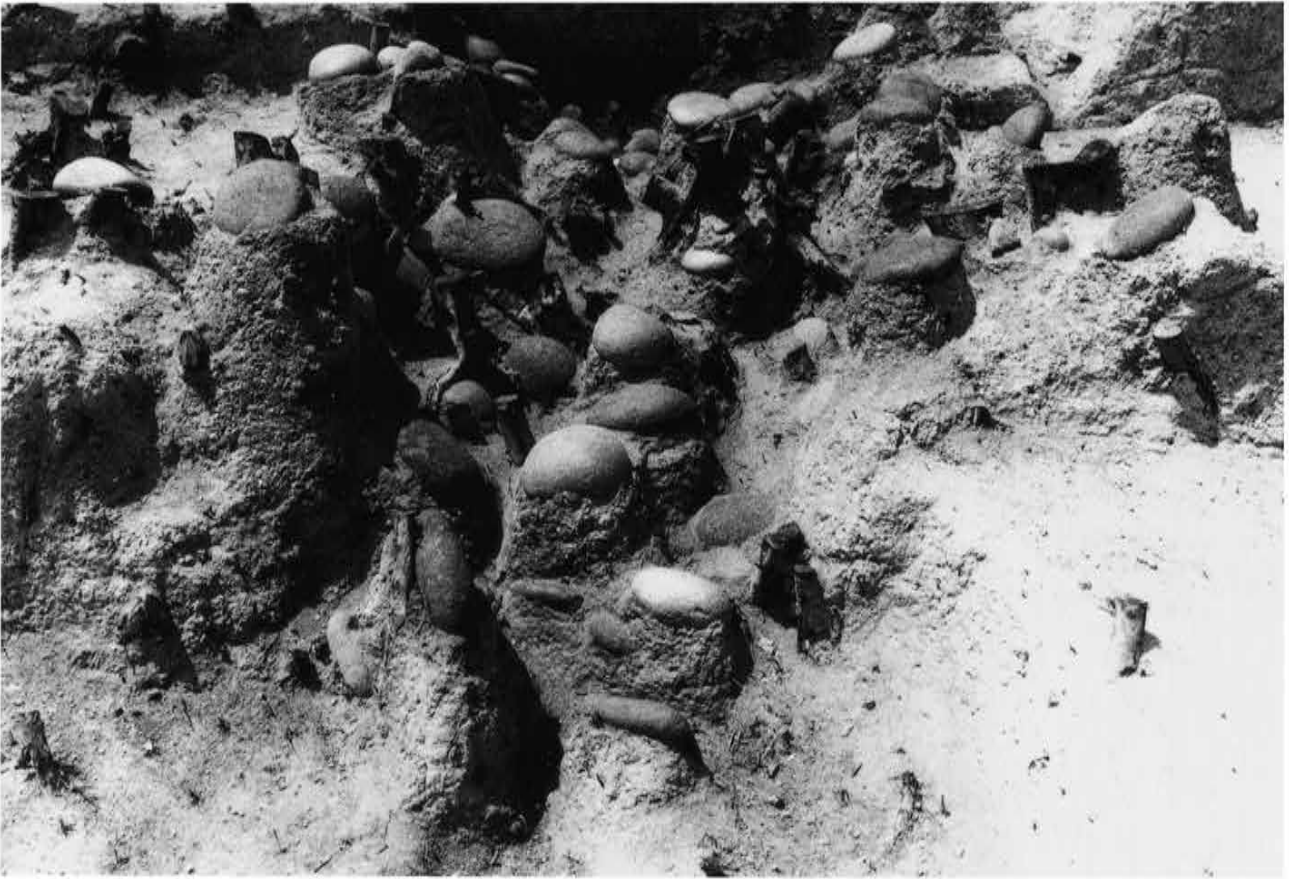
第 4 主体部玉類検出状況(西から)



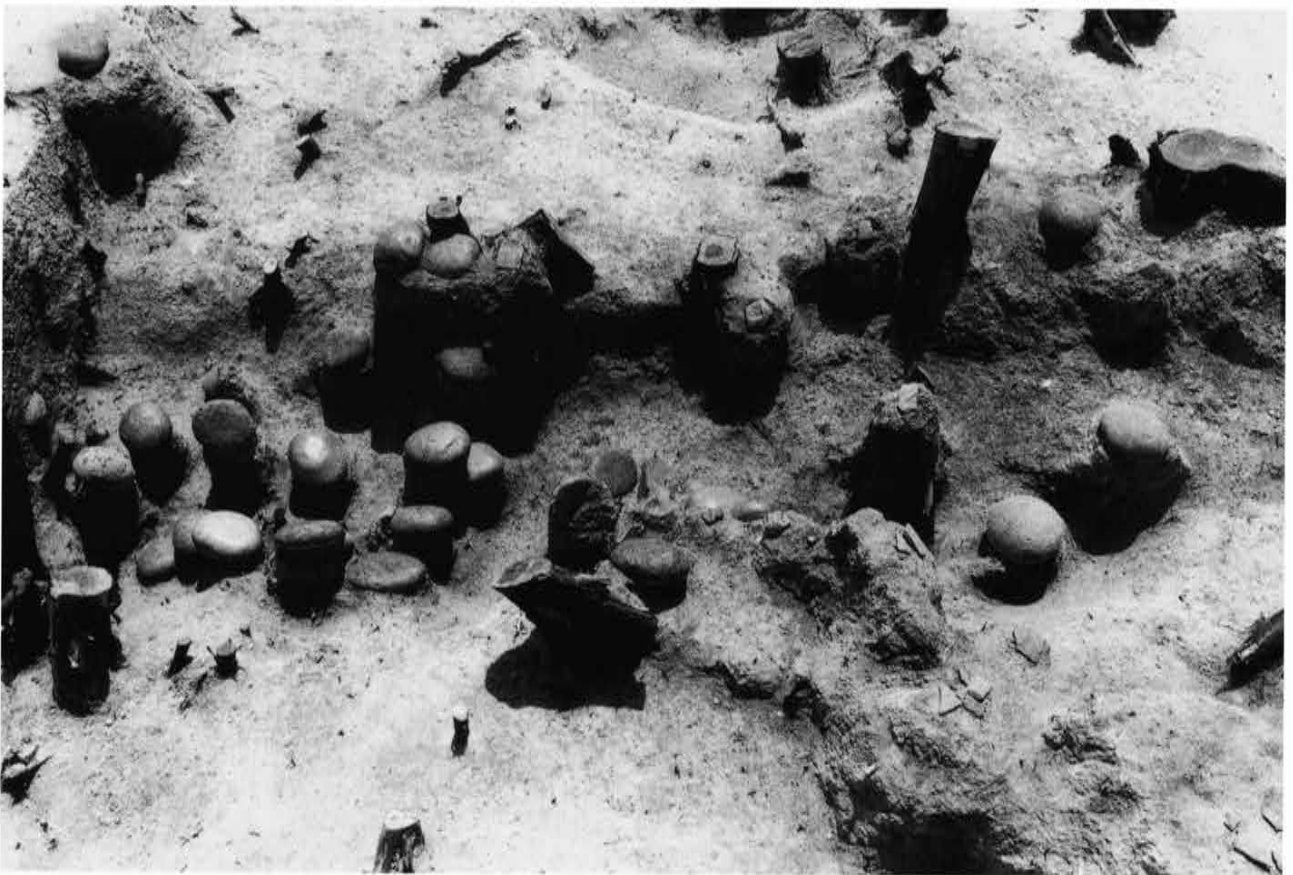
(1)第4主体部全景
(上空から、上が南)



(2)第4主体部陥没痕内円礫検出状況(東から)



(1)第4 主体部陥没痕内円礫検出状況細部(東半部分、東から)



(2)第4 主体部陥没痕内円礫検出状況細部(西半部分、北から)



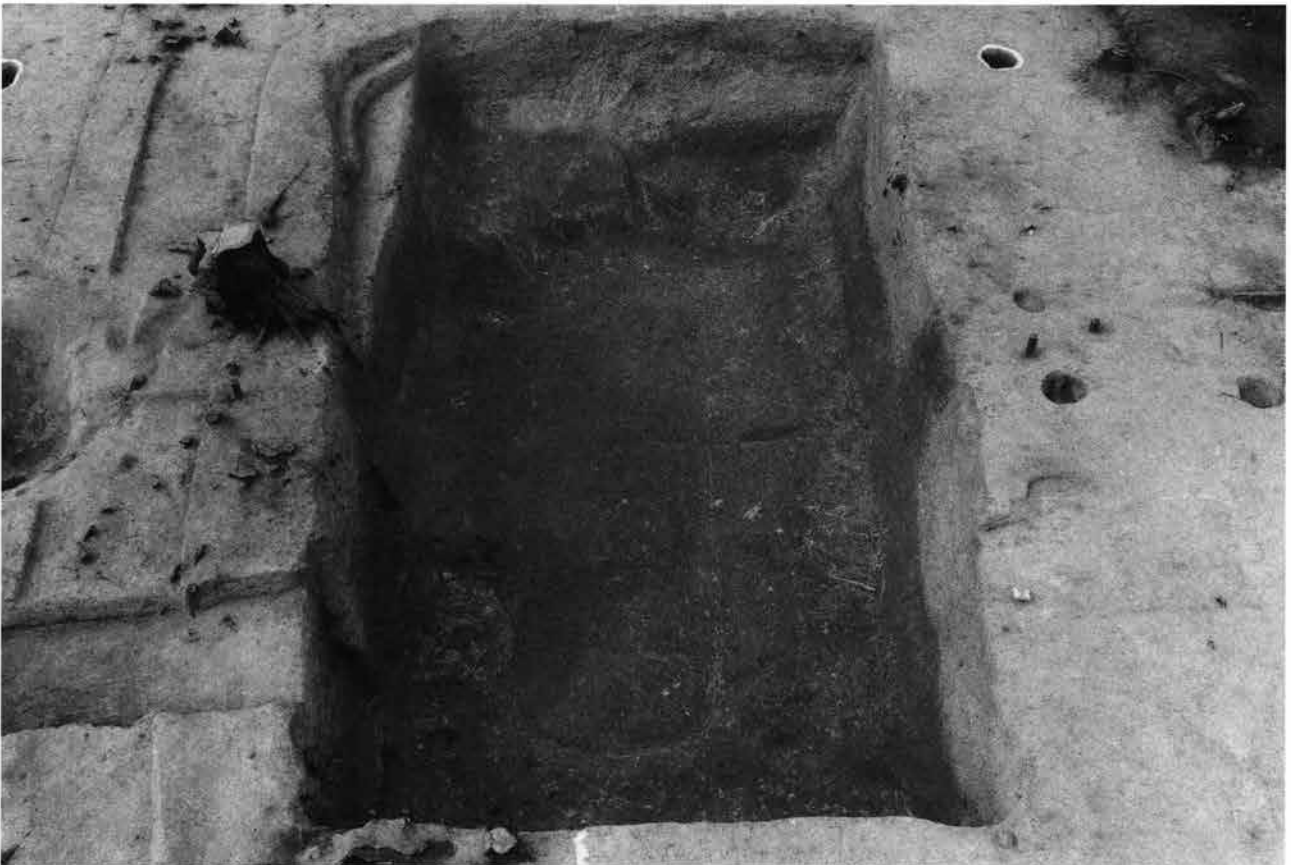
(1)第4 主体部陥没痕内土器(第12図2)検出状況(東から)



(2)第4 主体部陥没痕内土器(第12図1)検出状況(北から)



(1)第4 主体部墓壇内埋土横断面(西から)



(2)第4 主体部木棺痕跡検出状況(東から)



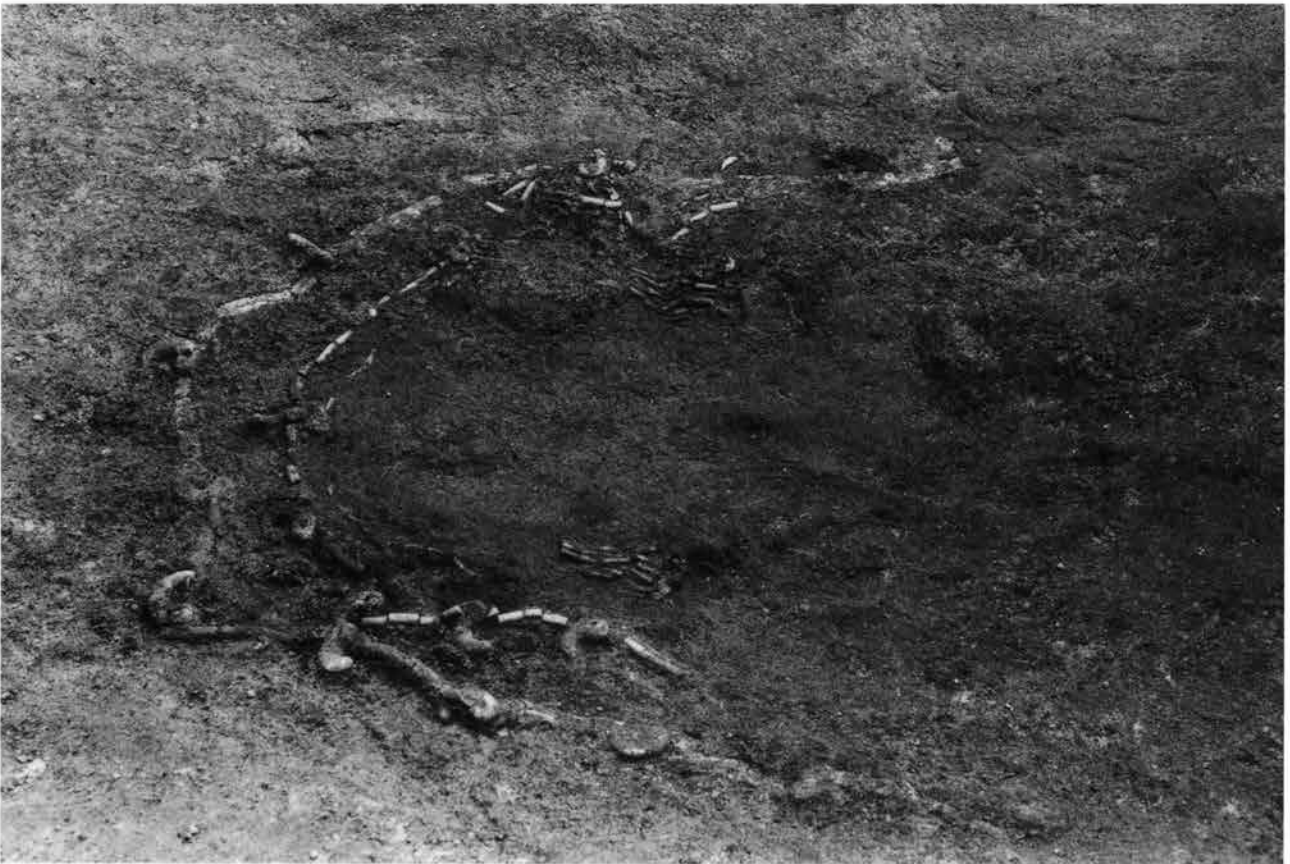
(1)第4 主体部木棺内調査状況(東から)



(2)第4 主体部木棺内埋土横断面(西から)



(1)第4 主体部棺内遺物検出状況(西から)



(2)第4 主体部玉類検出状況(北から)



(1)第4 主体部耳飾り(北側)検出状況(西から)



(2)第4 主体部耳飾り(南側)検出状況(西から)



(1)第4主体部棺内鉄製品検出状況(北から)



(2)第4主体部墓室内土器(第12図12)検出状況(東から)



(1)第1 主体部陥没痕検出状況(北から)



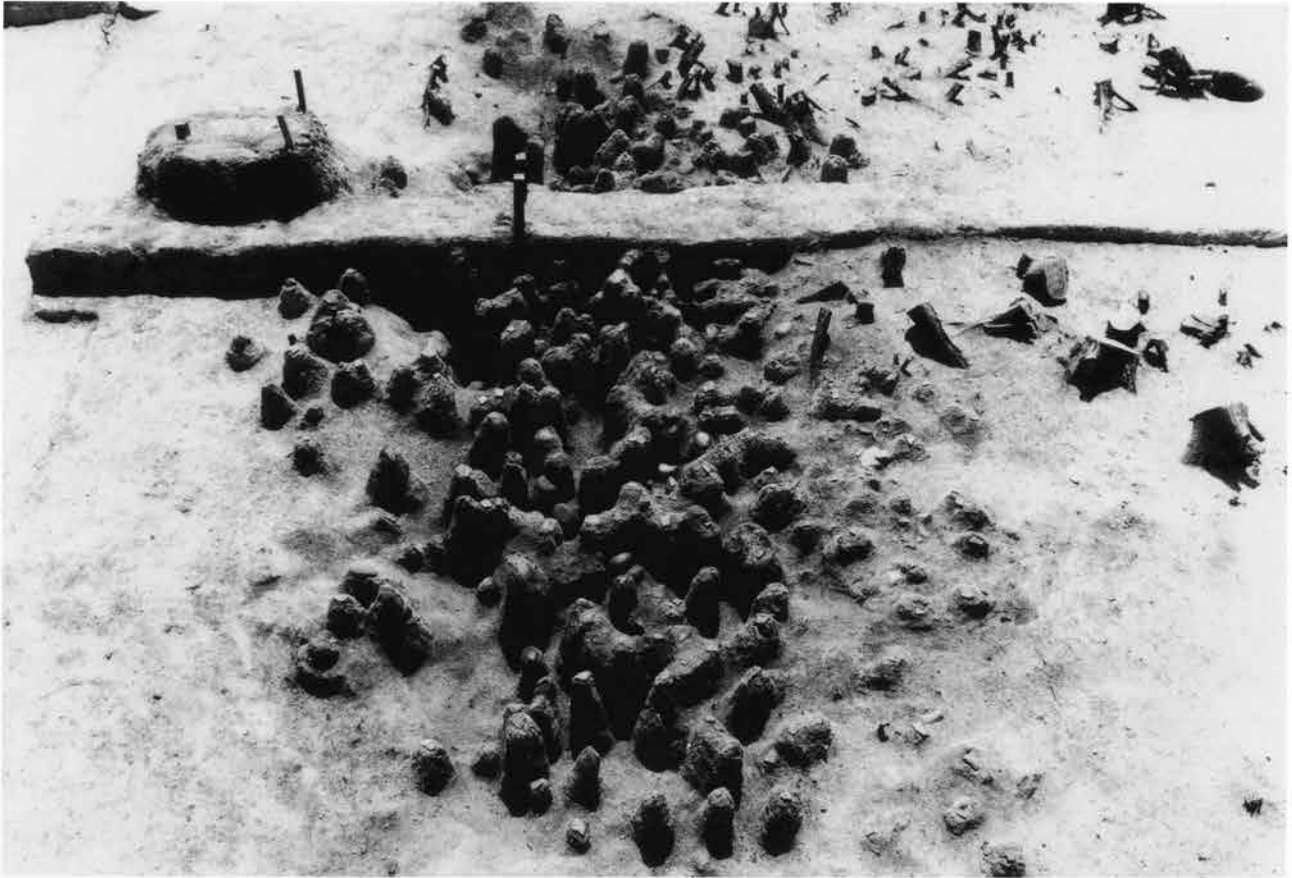
(2)第1 主体部調査状況(北から)



(1)第1 主体部陥没痕・柱穴列検出状況
(南から)



(2)第1 主体部柱穴列全景(北から)



(1)第1 主体部陥没痕埋土内遺物検出状況(北から)



(2)第1 主体部陥没痕底面円礫・土器検出状況(北から)



(1)第1 主体部陥没痕内円礫検出状況細部(南半部分、東から)



(2)第1 主体部陥没痕内円礫検出状況細部(北半部分、東から)



(1)第1 主体部陥没痕内円礫・土器検出状況(北側、南東から)



(2)第1 主体部陥没痕北端部円礫検出状況および埋土横断面(南から)



(1)第1 主体部陥没痕内辰砂検出状況(東から)



(2)第1 主体部陥没痕上土坑(東から)



(1)第19周辺主体部検出状況(西から)



(2)第19周辺主体部土器棺検出状況(北から)



(1)第19周辺主体部棺蓋除去状況(北から)



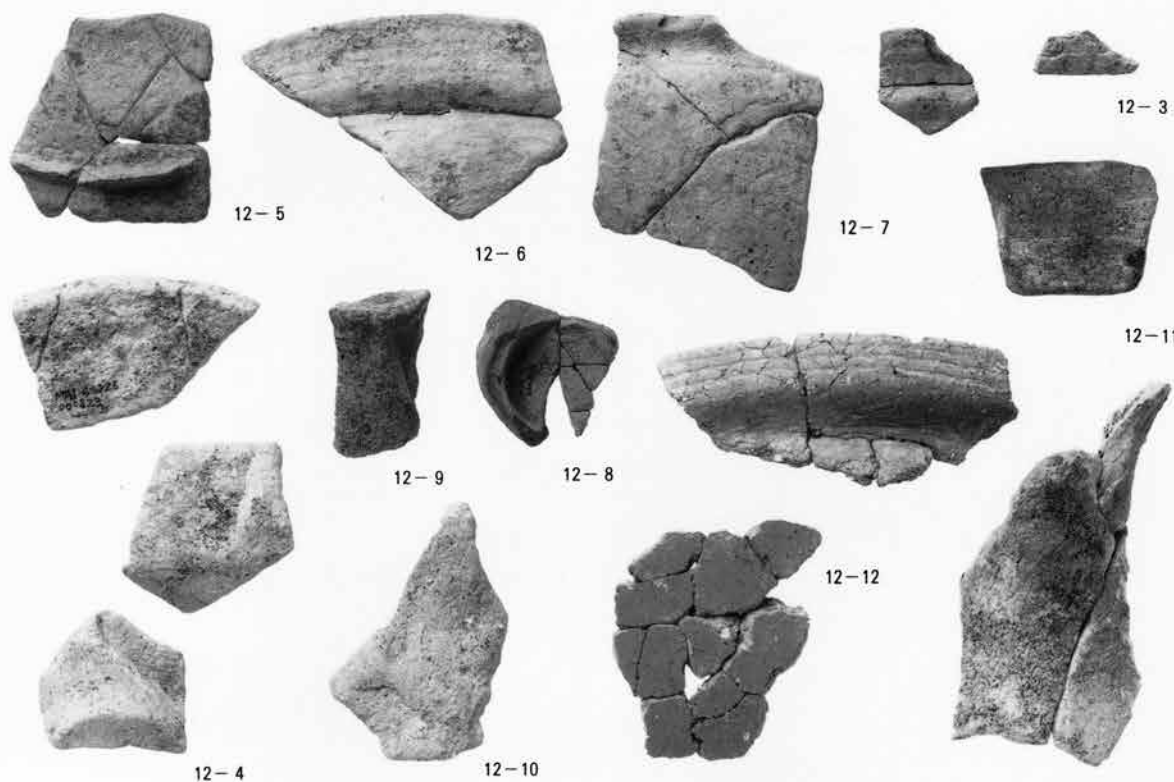
(2)第19周辺主体部棺身頸部閉塞状況(東から)

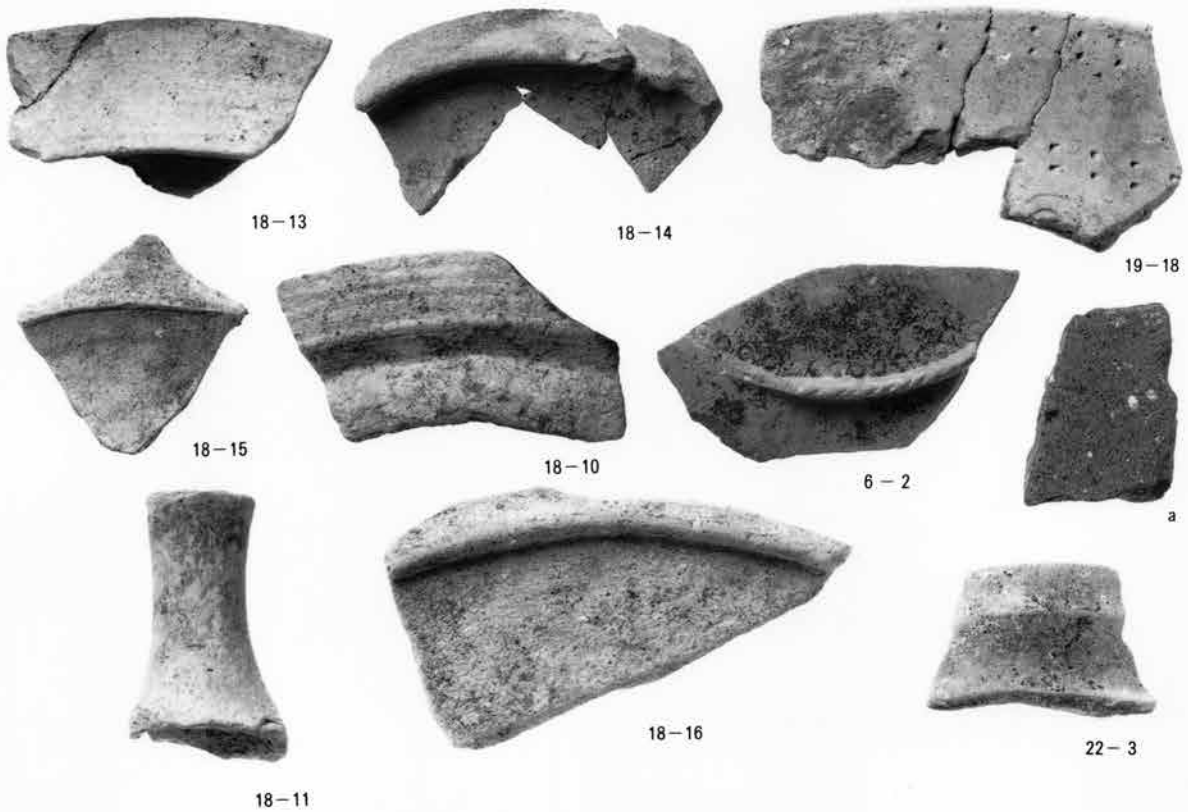
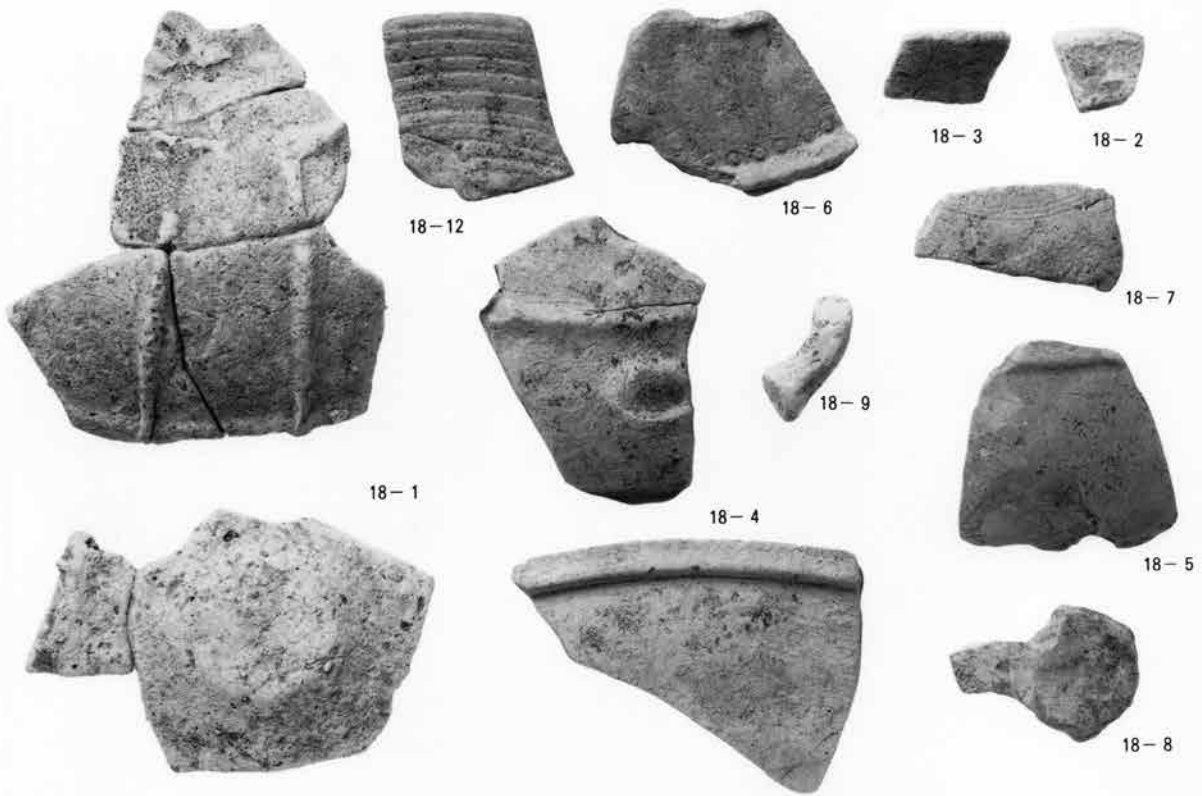


(1)第19周辺主体部棺内流入土除去状況(西から)



(2)第19周辺主体部完掘状況および周辺主体部検出状況(南から)







22-1



22-2



23-4



6-1

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第100冊							
編著者名	岡林峰夫・石崎善久							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2001年 3月 26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
あかさかいま いふんきゅう ほだいさんじ 赤坂今井墳 丘墓第3次	中郡峰山町赤坂今 井・ケビ	481	164	35° 38' 25"	135° 3' 12"	20000706 ~ 20001018	800	整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
赤坂今井墳 丘墓第3次	墳墓	弥生		墳丘墓/主体部		弥生土器/玉類/鉄製 品		

京都府峰山町文化財調査報告 第21集

京都府遺跡調査概報 第100冊

平成13年3月26日

発行 峰山町教育委員会

〒627-0012 京都府中郡峰山町字杉谷889

Phone (0772)62-7711 (代)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Phone (075)256-0961 (代)

